詩歌
連俳

美名分類抄

乾 押

1 3
645
2止

門 文知 3
補 644
巻 2止

異名 多類鈔巻之三目録

△居所
殿デン
禁中キンチウ
客舎カクシヤ
竹柱タケノハシラ
堂ダウ
築地ツイヂ
家イヘ
檜垣ヒガキ
田家デンカ
墻カキ

△器財
車クルマ 三
硯スヾリ 四
鈴スヾ 六
磬ケイ
鞭ムチ
水滴ミヅイレ
籠カゴ
墨スミ
扇アフギ
書籍ショジヤク 枕草子 栄花物語
弓ユミ
筆フデ

△衣食
念珠ズヾ
欽ヒツ
衣桁イカウ
琵琶ビハ
倭琴ソヾノコト
箏サウノコト
掬ムスボヽル

宇治大納言物語 続世継 竹取物語 金葉集 新勅撰集 類字名所和歌 続拾遺集 新撰万葉 悦目抄 新後撰集 古今集巻次 後拾遺 毛氈モウセン

笛 八
笠 九
漫 瀧
物 干
粽
綴、衣り

魚 十三
鰯
鮪 十六
真珠

△魚貝

鯨 十四
鰹
黄頬魚
蛤 十八

鯛
鮒 十五
蚯蚓

鱈
諸陽魚
海鼠
寄居子

鱧
針魚
鯨 十七
鰻

舟 船
釜
柴
考 十二
鉤り
猿 十一
鯉 煎汁

帆掛舟
笆 莧
尺
斧
菓子

盃
燈
新 十
棒
酒
絹 切

△鳥

雉 十九
鶏
鴨
鷲 二七
伯労 二八
翡翠
工き鶴 三一
磯鷸

鷲 二十
鷹
鸛 二五
鵜
雲雀
善知鳥
鷺
鶺

鵞 三
雀鷹
鶫
鵙
雀 二九
鷦鷯
鳩
鳥腋羽

鷲
雁
隼
烏 二六
鶺鴒
巣

鶴 三二
蒼鷺 三三

郭公
鶏 二四
千鳥

方目
葭原雀

猫 三四

貂

△獣

猪 三三

鹿

鼠 ネズミ
獺 カワウソ 三六
馬 ウマ

蜻蛉 トンボ
蜂 ハチ 虫
髯虫 ケムシ 虫
蜣螂 ムシ 蜋
蟒蛇 ウハバミ 蛇
馬陸 ヤスデ ムシ

△虫蟲

鬼 オニ
海驢 アシカ
蟋蟀 キリギリス 蟲
紫蟲 テントウ 虫
白魚 シラウヲ ムシ
蜉蝣 カゲロウ 四一
蝮 マムシ

猿 サル
麝香 ジカ
蚊虻 カ 三九
養蚕 カヒコ ノ ムシ
甲頭蟲 カブトムシ
蚯蚓 ミミズ
蝙蝠 カウモリ

狸 タヌキ 三五
鼹鼠 モグラ ネズミ
蛇 ヘビ
蛙 カハヅ
螻蛄 ケラ ムシ
蛤蜊 ハマグリ ムシ
蜚蠊 アブラムシ

狐 キツネ
犬 イヌ 三七
蛇ノ脱皮 ヘビノヌケガラ 三九
堂蜘蛛 カヤ キリ グモ 四十
蜀蟲 モムシ
斑猫 ハエ ミヤウ 四二
冬蟲夏艸 フユムシナツクサ

異名ノ類鈔

△居所

禁中
○むらさ紀ぬ
　のをゝらう
　わのくさ　朝廷をいふ
殿○みあらう　神代紀穿ニ
堂　こやた　秘花抄云、朝忠ノ
　たゝ
家　いへ
○やか　源氏東屋ニ、やの

家の宇礼(ヤカモチ)　家持なるよし

○くだ　えだ真菜(まな)などこゆるさま　枝(えだ)ともよむべし　くだは家(いへ)しげく伊勢(いせ)物語(ものがたり)にこきつるさまなどいへるかなめの社(やしろ)とよめるも家雑(クタカケ)のさまにて家(いへ)ぞといふ

○志(し)つや　万葉集十三小屋(こや)のごときやうかきをいふ

やハ賤屋(しづや)しいやしきさまをいふ

田家

こたふせ　万十三かるそにふせるにおなじ

ちゝそたちふせるさまなり　田廬(タフセ)とそろ

客舎

むろすこ(ムロ)　類聚國史巻百七十二、難波百済客館(ムロスミ)云々

隣　秘抄(ヒセウ)となめこさ　引古本の新撰字鏡あり

築地

えん(ヒ)ぢまかき　俗(ヒ)ぢをえんぢと呼(よ)ぶ古本あり

んぢま垣もかくごとにをつゝ

檜垣

さ(ヒ)ぐ垣このやうさ　引古事記あり

墻　みた(ヒ)まさゝへのごとき　新撰字鏡やうのものなれどこゝにいでゝ要(よう)なきやうなれど

○あらてゝゐむ　色葉和難(いろはわなん)などいやしき家(いへ)ぢめぐりなどをさをしてこゝにいでゝこゝろえがたきわらは紙(し)をもちて垣(かき)をくゝるさまをいふおのつからなるさけそこゝにいでゝあるべし

そむ妙こゝろの面影文ゝ月のをゝ姿をあらてくまとようそろ

竹柱
松む
かくそまつら　竹ハさゝをめてやろこのなろ城かくそ〳〵ら
とハいの尺ふるや。カトタクトケ通〳〵て乱。秘花おりよハ。行を
かくはら〳〵らといみといつう。トゝそえゆ
千尺
墓のおくつき　天智紀丘墓（オクツキ）こあり。万葉集第九「いつ〳〵
のちゝたをゝこのまあ〳〵ひ〳〵
〳〵第十八よ於久都（オクツ）奇（キ）とよむ〳〵
〇うなねまつ　源氏幻のようなねまつとよめるにて
なねまつとよめるにてそ

こゝ我つゝしみ塚よ生ゝ
ほ海松（みる）こ雨

〇器財　衣食
車
あ志（秘花）ろたまい　一花盛あしろたまいとよめるにて
もゝてこゝうわをれと。秘花なよ。あ〳〵ろ〳〵とハ車を
いふやし。そゝハ轍をいふこゝ〳〵
里舟（松む）
う〇たらよ〳〵　雄略紀云。天皇用弓剣（ユミツルギ）止云々。内蔵式。御弓（オンタン）。
万。葉御執（ミトラ）乃梓弓とよめり
鞭　もやまも　前に注よめり

籠○かたま　神代巻下に為レ汝カ計下之乃作二無目籠一云々

○くゝつ　万三「志乃乎巻つゝ」

○めさま　奥義抄云めさましは海士部にあり云々

○いさみ　神井おほゐ　万二番とあり。釜簁（カタミ）羅（シラカ）篩（アルカ）の類

○たまのつゝ　契沖説玉勝間あり

扇

○たまさつこ　真傳

○てなれくさ　「よ副そへ人のかたへに無なれ渡のそこねけれあれ

硯

○かざちぐさ　「和名紗云硯の異名

○かざうぐさ　「そこねまもうの略

○ふて　和名紗云硯須利

筆

○をみをも　和名紗云硯墨

○みづくさ　六帖「すゞりさへ

○ふでて　和名紗云古文作筆　布美　天　今俗にふでといふをふでて計の略

墨の油

○みるいさ　和名紗云硯の海なり云。硯は文珠の出眼なり。此石を眼石といふ。

此石をかりて見石といふ。「見石とそこねおもかもれもうれ

○ハたのハさゝや　ハたのハさゝやは

水滴
○をみすをかめ
墨 一色 松ばけふを

巳下書名
枕草紙
栄花物語
宇治大納言物語
續世継
竹取物語
類字名所和歌
新撰万葉

同書云水滴器 和名須美數利加米 一名 清水和須ともいふ
壺徳利 一名 小兒徳利
はくも製 増続の名ありまた又今続ともいふ 俗気ことなり
かくや姫 一名 大名言
萬葉万葉

悦目抄 更級記
光源氏物語の巻名
古今集巻次異名
第一 ふるゝ社巻 第二 もつ花社巻
第三 賀なごの巻 第四 初桜の巻
第五 山風の巻 第六 初もみぢの巻
第七 されゝ石社巻 第八 うき雲社巻
第九 まろゝ社巻 第十 うらびれの巻
第十一 あやめの巻 第十二 あふ葵の巻
第十三 松をしね社巻 第十四 花うつゝ社巻
第十五 徐月松の巻 第十六 わたり川の巻

第十七　うきふるの巻　第十八　名寄川の巻
第十九　ゆふの巻　第二十　和歌の巻
右晩学記之見しう。委悉深秘おゐても載ら除。
秘事ありなり但深秘ハ第三花なこと記巻。第七
ふ三巻の巻第十三ゐを。十八九なり。三枚ハ同。
み深秘おゐハ。おゐよ今一通りの巻ニ記巻。
もさのこハと今ハいとを

勅撰異名

後拾遺集　小鰺（アヂ）集と云津守國基小鰺をバそこいて採
老ゐんよかなこいて。お多くこうこう記巻名なり
金葉集　臂突（ヒヂツキ）主と云。志せ集といふこうこう名こく。同志せ集

ハいのなるんそこもう事ともいよなこうこう。桃華
よよ志せこの。一ゐうこをうこう。
書口ゐのよう。七月記巻ニうこうこうこうも
なこさこのくゐをうこうこうをこう知へこ

新勅撰集　宇治川集といふ。武士の名多くこうこう名し
續拾遺集　勅詞集とてゐか。空の名多くこうこう名し
新後撰集　は守集といふ。位巻の外史多くこうこう名し
右升堰おうこうこう

鈴　玉（こう）ゐこ志
念珠　おも（ひ）の玉
衣桁（かう）〇みそかけ　和名抄云。衣架字ニ作ル椸（和名美曽加介）空抄

…ぬ…よそおひをそなへをみそ…かけるぬひかきて…
○いろ 数本をよこさまにかさねぬひて人のかうもむ所をいふ…
のかうものしるし

毛氈

○かも 和名鈔云氈毛席 撚毛為席也 和名加毛(かも)
と俗に毛氈と音を用るものなるべし
撚 (仮用)よこいろ

磬○うつせこ 磬ハ打なるよし楽をよく撃ものなるべし
ことにあるみそうの筑波集に後はしは
るを物こゝろの取なるうたせこの打るをを独守の人中

…ようにもなるぬるもあるべくを附句畧

劒

あさほこ 本朝文粋に雄劒在腰抜則秋霜三尺

琵琶

○よつ弦を 五常楽よつの弦をふ公をもつてひきあ
はせとも云るくさなり琵琶をよつ弦とある是始なるべし
○なこのばら弦つさ 五事を表して四つの弦をつくりよせて思ひて
まの有さまをもわをれし。淡拍中節をおもひてかことをとゝのへ
おもあてなるうたをもなくことの八ま…なる方とゝもあるも琵琶弦
よゝろこし。和名鈔琵琶満月半月者在腹之孔名也

○むつ琴を　六帖に六つの緒のようめることをそなまひとをあるら神やふれたる。和名鈔。似箏而短小有十六弦云

琴（ヤツノコト）八雲　よもぎふもとをむしのね　八雲出物云は東式中巻の云々の虫なきといふを載たり云。上古つくりたるをいふ歟

琴（コト）　琴は古語拾遺に天の岩戸の事を記されたる所に天香山の五百箇真賢木を掘来て上の枝に八坂瓊の五百箇御統を懸中の枝に八咫鏡を懸下の枝に青和幣白和幣を垂と有て琴の事は見えず。されど神代紀に天の鈿女命の楽を奏給ひしことを記されたれば琴は神代よりありしなるべし。其外神代紀に天の磐笛磐琴の事あり。又天稚彦の喪に八日八夜遊哭ありて其時の楽は倭琴なりと云伝へたり。又日本紀に天武天皇の御時に新羅の人琴を奏せしことあり。又仁徳天皇の御時に武内宿禰が琴を弾じて神の教を伝へたることあり。又日本紀に応神天皇の御時に百済の王仁が来朝して経典を伝へたりと有て其時に琴の事は見えず。されど神代紀に天の鈿女命の楽を奏給ひしことを記されたれば琴は神代よりありしなるべし。其外神代紀に天の磐笛磐琴の事あり。又天稚彦の喪に八日八夜遊哭ありて其時の楽は倭琴なりと云伝へたり。又日本紀に天武天皇の御時に新羅の人琴を奏せしことあり。又仁徳天皇の御時に武内宿禰が琴を弾じて神の教を伝へたることあり。又日本紀に応神天皇の御時に百済の王仁が来朝して経典を伝へたりと有て其時に琴の事は見えず。されど神代紀に天の鈿女命の楽を奏給ひしことを記されたれば琴は神代よりありしなるべし。其外神代紀に天の磐笛磐琴の事あり。又天稚彦の喪に八日八夜遊哭ありて其時の楽は倭琴なりと云伝へたり。又日本紀に天武天皇の御時に新羅の人琴を奏せしことあり。又仁徳天皇の御時に武内宿禰が琴を弾じて神の教を伝へたることあり。又日本紀に応神天皇の御時に百済の王仁が来朝して経典を伝へたりと有て其時に琴の事は見えず。されど神代紀に天の鈿女命の楽を奏給ひしことを記されたれば琴は神代よりありしなるべし。其外神代紀に天の磐笛磐琴の事あり。又天稚彦の喪に八日八夜遊哭ありて其時の楽は倭琴なりと云伝へたり。又日本紀に天武天皇の御時に新羅の人琴を奏せしことあり。又仁徳天皇の御時に武内宿禰が琴を弾じて神の教を伝へたることあり。又日本紀に応神天皇の御時に百済の王仁が来朝して経典を伝へたりと有て其時に琴の事は見えず。されど神代紀に天の鈿女命の楽を奏給ひしことを記されたれば琴は神代よりありしなるべし。其外神代紀に天の磐笛磐琴の事あり。又天稚彦の喪に八日八夜遊哭ありて其時の楽は倭琴なりと云伝へたり。又日本紀に天武天皇の御時に新羅の人琴を奏せしことあり。又仁徳天皇の御時に武内宿禰が琴を弾じて神の教を伝へたることあり。又日本紀に応神天皇の御時に百済の王仁が来朝して経典を伝へたりと有て其時に琴の事は見えず。されど神代紀に天の鈿女命の楽を奏給ひしことを記されたれば琴は神代よりありしなるべし。其外神代紀に天の磐笛磐琴の事あり。又天稚彦の喪に八日八夜遊哭ありて其時の楽は倭琴なりと云伝へたり。又日本紀に天武天皇の御時に新羅の人琴を奏せしことあり。又仁徳天皇の御時に武内宿禰が琴を弾じて神の教を伝へたることあり。又日本紀に応神天皇の御時に百済の王仁が来朝して経典を伝へたりと有て其時に琴の事は見えず。されど神代紀に天の鈿女命の楽を奏給ひしことを記されたれば琴は神代よりありしなるべし。其外神代紀に天の磐笛磐琴の事あり。又天稚彦の喪に八日八夜遊哭ありて其時の楽は倭琴なりと云伝へたり。又日本紀に天武天皇の御時に新羅の人琴を奏せしことあり。又仁徳天皇の御時に武内宿禰が琴を弾じて神の教を伝へたることあり。又日本紀に応神天皇の御時に百済の王仁が来朝して経典を伝へたりと有て其時に琴の事は見えず。されど神代紀に天の鈿女命の楽を奏給ひしことを記されたれば琴は神代よりありしなるべし。其外神代紀に天の磐笛磐琴の事あり。又天稚彦の喪に八日八夜遊哭ありて其時の楽は倭琴なりと云伝へたり。又日本紀に天武天皇の御時に新羅の人琴を奏せしことあり。又仁徳天皇の御時に武内宿禰が琴を弾じて神の教を伝へたることあり。

其少子奉其祀今縣都陂中大家民傳曰公琴者巢陶冢也梦人謂冢為琴矣

二、批水、一一、注曰、一一西縣故祭陶国也。夏禹封

笛○ようでう　野ごゑに出吹よふでうぬさ出しといふ是なり

の篠曲清雅ようでうぬさ出しといふ是なり

盃○うくた　景行紀云昔筑紫俗号盞曰浮羽（ウケハ）

○もすそこ　原氏系譜云人くらもるんやうなるものくハせそうもたるそこのいづ一をれでさこゐ海おう蓮

子数盃云小飯資魚云々盃を出しそうしそ

船○うさく　松風考云いくつの子形をもつうさくよみてうれゆるらんぱ浦うさくを祈しさ海おさ仁徳天皇

市時。駿河國大井川より
人吾ゴ等ラ我ガ此本をうつして姓名を船に造るとき
其船ある事ノ勿論しかれども
造出せる例さらにさかなをとらく船を造そめられてうき
あるいはやあらん。和名鈔云。槎和名ウ水中浮木也云。
秘花 うきつこつも 花玉 わらの海ふねもうきあり人ふねうきつこつも
なるべきよりさかふねは波切ふねなるべし

帆掛船 いさいかけふね 帝毋きう溝とも

舶カ 〇たいし 和名鈔云。兌船ノ木也。宇志作舵舵船ノ尾也。

和名多以良乃伊之

しなつるぎ。同書ま。樴和名カチ。使ノ舟ノ捷疾也云。
是今謂櫓なり。第ノ事ノ条ノ二梶カヂ也とありて櫓の
事とはいふまじきにや。されど櫓といふ梶といふ

艤

艤 そつほ 艤花 言塵集同
燈 九つの枝 朗詠餞別 九枝燈盡唯期曉 江次第
八云。立二黒漆燈臺一九本ノ枝ノ件ノ机ノ四ノ方四角ノ中ノ央ニ加二
打敷一調之ノ九ノ枝ノ燈ノ云

枝ノ雪 言塵集ノ人伊

釜〇やまと 色葉和難ま云。かまをやしほといふとぞ。大嘗会

笆（ハ）

○あらまき　和名鈔裹二魚肉一也云々今俗語ニ所二謂のあらまき一是也

尺（シャク）○たのはかり　同書尺竹量也　太加波可利

漉瓶（レウビン）

○おほつは　同書藪器謂二清器一虎子屬也　今案俗語虎子於保都ゑ字彙虎子漉器也　西京雜記云李廣射レ獵見二伏レ虎射レ之中レ其レ頭爲二漉器一云々字治拾遺物語ニも虎子（オホツボ）をゑ

薪　たきぎ（秘抄）

○ふし　古事記柴（ソダ）垣（ガキ）打成而云々訓柴云二布之一とあり

柴　ほだ（喜撰）ゆける　雜用ゐんホ用ゝ

烟

斧　○たつき　月清集「とりてふる斧もたつきあれば」

乃とる斧のうなでふ和名鈔云鐇（ハツ）漢語抄云多都岐　廣刃斧云

物干

○そつさ　もろまを泊木なり

「庵ほそ物のそろ木我さよ」

棒　○佐（サ）のなぎ　弁明紀云故（カレ）以レ梓（シヂ）戰云々梓八与レ棒同佐の

なぎハ柄（ツカ）無（ナキ）木之義歟訓和名抄ゝ

鈎（ママ）　○ち　神代紀云、作二新鈎一云々ツリの反チなり
足代（アジロ）

○あなゝひ　竹を組たるあみ。あなゝひとも。あなのゝひとも
ぼちともいふ。萬葉集代のゝもし。和名鈔造作具也。楯
柱（クヒ）麻柱（アナヒ）と並べ出せり。楯柱ハ今所謂ツヾハリ

菓子

粽　喜撰（きせん）法師（ほうし）　ハゝそのゝ　ちまき　俗語（ぞくご）
もとゆひぐさ　ことゝひのそをゝてかも
雲（くも）なびくかすみ

酒　たけのそ
をゝそのゝ　竹葉（ちくよう）なといふ。萬葉集秋せと

卷之當よりはしまりて萬葉集のうたにも
つゝる萬葉かふみにてわまのくにの志をむなどさゝをそゝ
○ひさけ　万葉集第十三「さけ」酒名をゝしへいまゝの
花をひさけとよめるごとし
賢人（さかしびと）云、

○みわ　仙覚抄云、先達の称よさ酒ハこのうさぎれハ味酒
のみわとつゝるなりといふ。ぼさ酒ハ味酒とも佳酒とも
とゝ。又云、古佳國神酒（カミキ）川酒水をゝて為二大神一醸（カミシ）酒也
ゆゑにこの酒を名をとりて神酒をみわといふハ神酒よかきる
名なりと。和名鈔云、日本紀私記云、神酒私語云美和

○か一な志　毛内嘉休名の中稿を借元ふよをもつて酒を
いつなり。千種云。内裏御佛名の中夜僧元のと社うそき銭
や先むとて。招梨を含ふなり。ふ社をよ、酒をのむなうえ。江
次第曰。今夜蓋(スム)柏梨(ツ)左近衛府摂津在名也彼地利(ツ)庄造甘(サ)槽也もう〳〵中将和
氣菜とゑ人。摂津國招梨社庄といふ所を陽府よ
まのせられ〳〵。そ地社利をさて造る所こといつ。実未乳
時「となくさるこせの仏社中の招なるなとをもつあお
きゝむ

○ふく志もの　和名鈔云。野王案。凡非穀而食謂之
肴。和名佐加奈。一云布久之毛乃。万葉集ふくさ
招とよそそ。和名鈔云。銚(カチ)名といへるものといつ。つら
のやうなるおまく菜なとを捨。招をさ〳〵切そのし。同
汁あちなるよ志るをいふ
菜○あをせ　招そよ云。汁おとして。皆のそがもる事ハ注い
をもつて。ほざるよあるを残うるをひ一まそとゑく。つて。あ
をせハ菜しといつ。

鯉(コイ)煎(イリ)汁
○かつをいろゝ　源順云。木朝式云。堅魚煎汁　加豆乎以呂利

綴(ツヾリ)衣
秘抄
いろ〳〵こゝろも　秘抄おりる光一物のをその法ゆ本と
ゆとよめ招おさてろ〳〵衣独乃くるゝて
なそめこゝろも　汁とて志ゑく経ふれいそうめ衣とて

「ふつのうしがこそあめ衣きてもねゆふいいうてうへぬるも

絹切

○さいで　楮を紙にうつきおとしてあ井えひそめなとにさいてめおしつけさらしを尺付るなり。其外は捩条栄を抽出おもしろし

○たふさぎ（タフサギ）　万十六無心所着歌「ふせてふつのうしのこ山ふ形魚そとうさる。雄畧紀。

○褌（フンドシ）　著褌露所相撲（アラハナルトコロニスマヒトラル）

△魚貝

魚

○こづむ（秘元）　説文「魚水蟲也」ゑらにおよらつはうく出の様にうねりて水中なるをよくみさこなりえく

○さい　幸系抄云「山さとをたのさとをいもくむつさをおしねかをとてうみもろうつほたのさとといふ田社さかといふしさいとはちひさき魚しるく

○ぶた（ブタノヒモノハタノセハモノ）　伊勢物語廣鰭狭とあり。幸系抄云

小ぶたと・晏子春秋諫上第一云。晏子曰。不可。河伯以水為國。以魚鼈為民。今。敖未知二尺之鯉亦

「おろさまくなのはとんにはうく小のたくくしひし

せだもの　日本紀（ハタノヒモノハタノセハモノ）　廣鰭狭とあり。幸系抄云

○あさち　まなまなり。ぶうは假名。和名抄
いうてあさちのかをぬきてもちゐる方れやとぞ。ハ
なり。ぶうは假名。和名抄
なく足こなれそよそるとぞ。うたは園ゆたり上。天のか
くちうそめるまでを山川のあるちもおさのうて足しくう。号
七大将あうあ油いまそ。ふふなるとおくらし。
一ものまにおそちハ小魚のあなるべし。和名抄
鰯（イワシ）といふものを列ぬ一あ
○まなる　古事記　魚の一ま（マナ）ごと訓を。為（ニテ）鳥遊（トリアソビ）取（ルヲ）魚（トリとあり
いをほ　藻塩草　まごいさこと。ぬきされなるてそ。ご乗り

○いさな　允恭紀。衣通郎姫歌曰。異（イサ）舎（ナ）儺（ト）等利（リ）ぬ。
いさなの海なるべし
釋曰。謂鯨取也古語異（イサ）舎（ナ）者鯨也。儺（ナ）者魚也云々。
万葉ぬ勇（イサ）魚ともあり

鯛　○あかめ　神代紀下曰。海神乃集大小之魚（トモガラ）逼（セマリ）問之
魚曰不知唯赤女（アカメ）赤女鯛名也云々
○はらの　云幸根源云。狡赤鯛贄として魚を筑紫ちうる。
景行天皇の御宇。筑紫の國宇佐郡長濱まで。海人を
を釣ぬまる。まほ聖武天皇天平十五年正月太宰府よ

…ことを記すべし。按ずるに魚ことに字鏡和名鈔共に然ずおよそ鰾ある列挙して考

鱧

○むなゞゞ　万十六、文やせうをの武奈岐(むなき)ともよめる名ども。源順云、文字集略云、銃頭口在頸下者也云々。契沖云、口在頸下鰓當在胸(ムナキ)胸鬐(ムナキ)乎云々。うなことを記すべし。

鰻(オラ)

○なよし　和名鈔曰本紀に小長谷若雀命(をはつせわかさゞきのみこと)と小を上佑曰記ことゝ

○くちめ　神代紀下、口一女自白　注鉤ノ口ヲ奉焉口一女即鰻也云々

鰌。

○つなぎ　このころとよめども古名なり。孝徳紀に塩屋鰌(しほやのどぜう)と云

人名あり。万葉十七に「ほとゝぎす」字鏡に鰶鯵等ある字に共にコノシロと訓を「下野や室の八嶺に」ゐる「ほとゝぎす」そも燒たるこのしろにやくらん保氏私記云、云

きのちよりなりまさるこの魚を云ひ添ひ抱き云ひ添ひ

しハ魚しを魚ふるけよりふるさこのほといふ如く

鮎(ニヒナマヅ)**魚**

○こつを　漢語抄云、古都乎、本朝式用乞魚二字、東雅云、品字箋鮎一名魚游とハ魚游鰶鯔

ともに舞小朱子其拍をとるとハ、古の鮎魚今ハ二ナカツヲなるも物ふつうに俗乞ハ

音骨ともさく切さらしてなます・カツヲハコツヲ去て料理ナドとも味ハ美なるをいふとぞ

鐃陽魚

○こめ　和名鈔云、鐃陽魚（和名古米）味甘貌似鱎無甲、口在腹下者也云々、東雅云、即今俗工ヒトといふもの是也、エヒとハ尾のもの〳〵を燕尾といふ説をいひしとぞ

針魚（サヨリ）

○さより　和名鈔云（和名波利乎一云与呂豆）口長四寸如針故以名也云々、東雅ニ即今サヨリといふもの是なり、神武天皇御ものゝ事を釋ニ鯨多集いつゝさゝハサヨリハ多依（サヨリ）なり、ヨロヅといひしも云々義なり

鮪

○しび　日本紀真鳥大臣、男鮪といふ人あり、万六鮪釣と海士ハ知らとうたひしものから

黄顙魚

○かじか　寺島氏本草綱目を引く、黄顙魚ハ今俗用ふる和名鈔鯛（カラ）あり、カラとコリ通音下略して俗よりし来まてるもの、おこぜ鮠（カジカ）鮴（カジカ）鮧（カジカ）鰧（カジカ）鱎（カジカ）鰧（カジカ）鱎（カジカ）鮧（カジカ）鮴（カジカ）鮠（カジカ）鱎（カジカ）鰧

黒帯黄腮下有二横骨一両鬚極細翼游作レ聲如二蚯
蚓一吟歌人詠レ之云々本綱翼游作聲如二軋軋一云々
いつゝ或云廉社幸く吟るといつ
て云ふ也法は日記る云、夜の山小雨さそさしいふ
しかぜのやう社あて字ゆ多くて「せさいるく」夜の山あらし
くといふやうしかしこの雨とをきむなり

細魚

○うるとこ　和名抄るそ
いなくく

海鼠

○こ　なまことといつゝて、熬海鼠ゝ嵐ゝ對セ名ゝ訓ハ海
鼠社二ゝる歟コといつゝ古事記云天神御子ニ仕奉耶
之時諸魚皆仕奉白ス之中海鼠不白サ云々

鰒

○いそかひ　契沖ゝ云、あわびを一方ゝふくいそうひとよ
そう、ふ名なるへし

真珠

○あこやたま　あこやハ姓ゝ飯貝ゝ類ゝ
第七「伊勢社海あまのさまの飯玉とりて乃くちの
返ゝ志ゝらく、叫声を六帳ゝそ」あこやゝ
なまよこ返きう、志ゝの玉ゝてあこやゝ玉ハ飯貝ゝ類ゝ珠なる事ゆらの
なり、山のさまゝ飯貝ゝ類ゝあこやといふ貝ゝ社ゝ
ゆるさまゝ、古云をなそのふ六帳を張ゝ六志ゝう、和

名称もあらやと訓を存見る事なり。和名抄に流六帖を引て。鮫珠なりといそんよ好
ともあれど。大さ豆ほどもあるのを大さ豆ほどなる銭七十
貫ほどにつく所ほしがる事なるべし。なを鮫珠の優劣
を論ずるを思ふべし。次に未識に蜃珠為真也云々。或人云。六帖を誤
る事共いとゞ多し。まして引ものをや。といへり。さる事
なり。訓義めづらしくアとそあらむ。コヤハ是之古語なるも
をこやといふ言多し。「こや世の人さとみてみやこなる
ようめり。訓義鮫是真珠なりといふも。アハ嗚呼と
歎ずる辞なるべし。訓ハ本のまゝ同しかるべし。

蛤

うむき　景行紀五十三年秋八月。白蛤為贈進之
云々。今俗蛤もうむきといふ。
ことばの上略なるべし。

蚶（アカガヒ）

○ささ　皃をささと云つゞけて。末雅云。叶貝かゝる刻めなど
乃ちゝく紋あり。國俗凡物乃理あるをささといへり。
ちゝく。志保之理云。與おゐ地名糸（キサカタ）潟も。糸ハ借字なるべし。
蚶潟（キサカタ）なるべしといへり。

寄居子（カミナ）

○からな　添順云。和名加美奈。俗借用蟹蛯二字云々。
方まじれるかうなれば。ちひさきをこのむべくおのを
もあれどなべてからなかうれの雑汁し

鷺（ムラサキサギ）　○かそのめ　源順云、鷺　和名加波加米　文真名抄「かそう名ともに万代ふるともみのあるなくさうわらう葬

鳥

鶯（莫傳）　さなみ名　私按ずるに「春そくるやいなや鳴出るより山里社新ら
さてなき名ら
ほ
ん名ら
ん名
ほ
ふ
ほ
ふ
ほ
ふ

○こゝめる　色望私ある人の家を招けそこ
うるゝをゝ國をこさう〳〵そて、勅使を
おもひくにを招こうをそひこうられ、勅なれを
招ハそて正客の宿ハとちはくいうこうこ人招のあこう
かこうこそてなこうこれ文使門あこれうわくとめ招ひく、
こうそこうこうこそこそ然ハ使客をといつふこと
秘我
すかねる　「わこれそ
秘中
うつを正　こうこうの
火の座となるめる
ゑもこうとおこうこを今招京抵はまを万招ふこうこそてこ也
いれとこうこ文万客こめる事なり、又組をとうたこうと云

事も不審疑久ハ論語鄉黨篇、山梁雌雉時哉、
時ニ依ようく梁ようこ吳ゝしとい文文。ゝこうハ基いこれ
なこうこうしゝこうれこもはこうふこうおまんこうこ。雲物往
来ようこ。ゝ今或ハ持来山梁味ハ何ゝ如之ゝ。
まこうく新のゆとゑえこう。明衡ハ大学寮博士こうく。俊孝
の人なり。故こうやあらん。散本集連ありまたそのほに
こうをゑえて。俊頼朝臣ハ源ハ清ハこうきこうて。
遠雲居「乃さまハ海の力をやどして本妻後とをぐし。
万客ハハなこさ事こ但ゝうたこうとめこハいふ一のこんの
うつこうとい文つゝ

○のつとつ　本草綱目釋名野鷄とあり。ゝハ助なり

天つ出津つ波のこと・継體紀なにぬねつかまつ八な
ろ行のつこうさ・しハとも上下略と乃こと・古事記
まてさのつこう此もいつう

鷺　つきひ　つきひ八古訓なり・天智紀云・六年葛野郡献
　　白鳥（ふたら）私記津
　　白鳥（ふたら）波比

郭公　和名抄
くさきら　「くゝ」なきつる遍昭　今按・俗擬口状云・苦帰（キ）楽（ラ）と書
しくるゝさつき　万葉云「あしひき山郭公
八声（やこえ）時鳥　何楽（なに）なくとさ万葉云ある事なし
なき多　ゑみ万葉云うぐひす入めるものもろ

皇統記の時のもなくなるう

志てまたをさ　神武紀云・志て弖たをさと八志つのなきを
とつなり・ほとゝぎす　万葉・奥義抄童蒙抄綺語抄共ほとゝぎす歌一
いつう　暑
こ我いふといつう
うぐひす　拾遺集哀傷哥「ほとゝぎすなく吾於
ねうらうらかれかこのさくれの比喜集おく歌云八ゆく春を誰
てまつるほと八喜うぐひすなるまをかくとをくるといつう・うぐひす
をとゝこ・記昭云わくご
ごの字付ていひ出しるなり
紙門うけを志ほ

くひぬひ　古説云歌云八指ぬひてそらくるこゝろにて
をるなりといふ又擬口状云後擬口状云

常ほ詞
よた、
五露
早苗
残
もせ
境
さくめ
さくもも

同
夏雪

百寒　暁筆記ス
玉ゐ
田毒
そたくも
たそかま
玉さか
うたた
めつら
夕かも

同
秋月

おをさく
あやめ
稜めも暁筆記ス
むもも
くつても　待遠おとろたてなうんかとなくとよもく
秋とも　暁筆記ス
おうけも
あさも
あやなも　暁筆記ス
あこも暁筆記ス　紅葉ともてなせ山もとくさもあうん

○くさくも　くさくもの宣誤ス
○志ろも　是ハ藻塩と所謂賤女の田乙写誤ス
○たゐさこの
○たなこの
○はゑやこの
○うたひも
ほと暁筆記ス

○こと角をこと　空赤で説正ここをるて空角赤なる矢
角をこととい「なさふすま矢そひさ」紀示宿のこ
さねさはふふうさをこと
○らんる名　花ハ和名鈔ニ鷦鷯（サヽキス）今之郭公也とあり此
字音をいふのこ死は撰に述よらんるハかをさぬのそしぶ
る冬未秋中よをさるは毛のむくくたるのがを
さねのこくく晩華記の説も同し
○無常名　後撰に述よらんゆ此る無常ならむこいへき
○こひ志名（死ぬ鵑）　茶よ同し若社をふくさ
○いそ〳〵をこふ名　万葉集第二いそくをふる

鶺鴒

○何つ名　姫川池部ろこ後拾遺はほるなどねよそろう
さて是のこ和し〳〵ようをれめし
まと（い）て　万志ほとうをむうなて社のをの社ねをさぬよ
さささ争てこもへともかを
ようをむうなてとやこそ
○志よつ名　神武紀之摩（ツ）途（ト）等利宇（ウカ）介辞（ヒ）餓（カト）等茂（ス）云
いさよは記ニ「志ろ」之摩途等利宇介辞餓等茂云
もおよろく往よかさて
ちろうもよろく来ろ
二季（死ぬ）名　莫住秋同し

雁

をらうこゆひりのつるむ

鶫 日本紀

○いさら 万葉 たゞ訓ともおぼえず

うく仙客抔云いとうはうつくしイとうとうつくしきこと

鷹 くち 仁徳紀云、四十三年秋九月○天皇台酒君ニ示鳥ヲ曰、是何ノ鳥ノ矣、酒君對言、○百済俗号ニ此鳥ヲ曰倶知ト是今時ノ鷹也

をうくおさえ艸をもちゐてすゑおくなり

なら楽名 本居のごとくなるべし

かしこね 「かしこ」を越てかつかつきものをもとるもねえ

鵄（イタカ） ○さもたこの 日本紀ノ間人阿部ナドノ名ヲ、間人鵄子ナドニモ書リ

名を、間鷹の義歟、又半鷲ノ契説

○このも 和名鈔鵄似鷹而小者也、契沖ノ云、似ノ字ノ義なるべし、さて西国にて、なりこ、せこ、などいふ物、学べのをゝ萩のかり衣などよめるこれ歟、秋のをゝのり

雀鷹（ハシタカ）

○つゝ 和名鈔云、漢語鈔云、須ゝ美多加 或云豆ゝ美 一地図ニ有

多賀ニ一片ノ数ノ山ヲ以テ名ヅクルモノヘヲヲンヲヲルモノ

○えつさい　雀鵏（エツサイ）ハ雀鷂の雄なりといつて　そゝかしがましく
ねをおとしおそろしさいふにてかハ鵏（ハヤブサ）ぶらん

○あさかぜ　西国もの　そもさうの
山のすそなどにおほくゐる小鳥なり風雨の日あさ風ハ集の吳名し
ゝに、ゐます字鏡小鳥風鳥（波也）と見えしよう、叶訓なるべし

○さゝ〳〵ぎ　鷦鷯（ミソサヽイ）
そもさうの新称なりさゝ〳〵ぎその風ことさら學くの意ありいとやの事
まし、西国にもさまでもおほくもあらずそもさゝ〳〵ぎにもあらず山
そもさゝ〳〵ぎとよぶ事もあるしかれどもさゝ〳〵ぎ一まのこれおれ
さゝ〳〵もおのづからさゝ〳〵ぎとなるもあるべし

鷦（ミソサヽイ）　考證ニ　一方ニハまた小鳥の略にて羽色のまるきなどよりいふ

鷽（カモメ）

○いさごのうみ　船恒集ニ亭子のみこの大井の行幸せさせ給へる時の事かゝれ小さなるまろ
ともをまねきていさごのうみにうかべてうたせ給ふなどいふ

千鳥

○いそなつ　そうしおふ鳴なり
月よミ千鳥
ゆふつけ　ゆふつけ鳥ハ鶏の異名なりといへどそれハ時をつげ
ゆふつけ鳥ハ鶏の異名なりといへどそれハ時をつげ

時の境のやうで、おほやけのきこえもあり、
四方の関よりまうでそふらふしこそ
一 庭つとり　一万七千疋つゝ
こゝろもおそきぬうも
一 かけ　一万十二そくの足よといねをおさへてあらけなるにはとりく
一 しかやかまびすしくなくこゑ
一 八声の鳥　暁をしらせ、八声なくといふ。今案ずるに、八声鳥といふ。
ぬしあり、一概しかたし。是八声を必数多く鳴なき也。八
声のそらをいふまでもなし。八声ともいふも、多くこゑ

をいふ花の八重なるかさうなどいふ八重なるを数の
多くなりしをいふ。八声鳥とは、八声を数の
ふこゑまでおくかぬなるくしこゑ
一 くだもの　くさ〳〵とあり。元真集よろづ詞波
もよせくとよめるもそこそこを海人のあくことかけとよめるなり
一 つけ鳥　南朝五百番の合よりこそ
ことよせ鳥　神代巻遂聚常世長鳴鳥とこ「波々木
も鳴音をいふ。非也。そこのよそ

鳥

さく本綱時珍曰南越二十種長鳴雞ときまよ「唐
火生ところところよりおうしきものをおもちるさけを吸ふ
ほんそう
本草
一名
おもちる　　ねまいざる
八歳の事ゆゑなり
一書に鶏を渡广冥よりくハトヨるといふ山法の関よ
てハラシカイるといふ
おはをそる　日本霊異記巻中行基大徳詠歌曰
加良酒等伊布於保乎藤等利能去等乎美亭下略
万十四よもおはをそるやうそ散本ふよ「うそもなさ
月おひうるはうそおはをそるやうなくと

秘抄
ほもす　花五日〜「ほうをもと敬をそるやむうるうち
本話下をくるやうをそるやうる

就鳥
ねる　玉　「山のこをそるやうる
るうをそるやうる

鶺鴒
日本なひる　深養父「主のひるをおちるいそのなるつとう
うる時是よ行のうもなし〜

蹄

○主つと里　を案和難るに主のとうのうの
のもうそわく歌ひよなるうるやいよ事あり「主のとうのう
なおうそひよるうるやうをひかうなるそやる也

鳩

祝国家たつ　後のなるうまこ

二夢る「そもそも此洲島は
とうもろこしなきと

鵺（ヌエ）鳩（サゴ）

みなこさもる

○をとこ　契沖説「万十一「大海
乃あら磯もとゝろ朝おし人まくほりさ我ゐ我
○志なゐる　契沖曰説「万葉ヨ水長（ナカ）トリ鳥ハ此鳥ヨ
よなづく居ゐ為し云ふ

○覚賀鳥（カクカトリ）　景行紀ヨ

鶺鴒（セキレイ）

いなおほせる　結旨お云いなおほせとうハ在所ヲ

○つゝなせる
つゞをゝへる　日本紀私記曰「止豆岐万奈比
止利（トリ）又云止豆岐乎（ツギヲ）志倍止利（ヘトリ）
古事記雄略歌云「麻那婆志良（マナバシラ）表
由岐阿閇（ユキアヘ）云く字鏡ヨ「鵐求魚反豆ゝ万奈柱と見
ゑゝろ

○ふをくなふを　和名鈔訓

「和名抄いなおほせるを
を説、神代およ事
なたゝさ　夫事業を達「をゝ
の居ゐ紀さうなき事ゐ
○つゝなせる
つゞをゝへる　日本紀私記曰「止豆岐万奈比
止利（トリ）又云止豆岐乎（ツギヲ）志倍止利（ヘトリ）
古事記雄略歌云「麻那婆志良（マナバシラ）表
由岐阿閇（ユキアヘ）云く字鏡ヨ「鵐求魚反豆ゝ万奈柱と見
ゑゝろ

○ふをくなふを　和名鈔訓

伯労（モズ）
秘抄 さいつとりをとる（本ノマヽ、さゝらをとる）

雲雀
ひめ云なる（ヒ）事のよし所云なるうそあからさま居表の外よ
ことさゝそうつ

鷐
よみつる（ハヤ）よりつるまでは法なるよし云ふ書よ鷐の
鳴時招魂法ハ死者乃
復生を祈る事よりつる鷐の鳴時行ふといつて冥途ゟ
なと、そんごとく、よりつるまでハ方楽よ黄泉をヨ
ミとよそうゾツハ助流、拾芥鈔云鷐鳴時歌「ヨミヂ島我カ

キモトニ鳴ツナリ人ニテキヽツコクタヽモアラシ

雀
集（ツヾクリ）
秘抄 たゝつ（ママ）
みるせる（ママ）「こゝやまち社あうけこゝさゆふれるせる
さゝくりなるせる

○さけ 集、辨色立成云佐介
○いひとよ 皇極紀云、三年三月、休留産子於豊浦
大臣大津宅倉ニ、天武紀貢ル白茅鶏ヲ釋ヨイニト
ヨハ集ト異名なりといへり
かほよる 薬語ヲ云、是ふくろふ社をさなき時のなり
そゝ拂よ、をゝそ時のなとハ、毛詩注云、流離鳥也、
少好長醜流離集異名也云、是ふくろふなるへし

かほよ鳥　藻塩そよ。世俗そそなといふをそしそく云ふの
ねそふみそくのかほよ鳥をかきりそはそ孫ハなれそ今按
よそなといふそとハ古事記の事　記之上ざそ我そそよといつゝ我ハ
二とナ通して、俗そなそといつそなそく〳〵
〔そそよ　古事記云のよそにとりみあをさゝをしとよめり
○そい　和名鈔鳩　和名　曽比　東國の俗キヨモリといふ〳〵東歌
よそそしう

善知鳥　和名抄　よなる　まそそそのそひなそう我そそまそて涙をわの
くおとそんよなる。注云。そうひなそうとよみをいつそを

そ集よそうんひなそ。そそふそそ
ハまそそそのそん云なるとつく事いふよなるハナハ
無きまそて。なそそ我わかくそ
ふのるをよそそるのそそて
らんもそそくそそ。て考ま
やをそそとつといつそ。一書
うむ。猟法おやのまねをそ
とそそくそひ出る我そそ

鵺　ぬえ

○いかるが　そ俗よ云。やめ時　言イ
云。二條中納言云言。いかるが
いふほよ下めうまし〳〵とハ

をつん

鷦鷯（ソサヽイ）

○たくこゑ　東雅云、巧婦（タクミドリ）ハ鷦鷯なり、巣を作る事巧なるゆゑ名あり、善く名苑る、巧婦ハ名二蘆虎一といひしハ誤なり、和名鈔に此をも収しるし、暑

鷭（コヨモ）

○たうべ　和名鈔云、似レ鴨小、背上有レ文　多加閇（タカヘ）　未詳

人ハ沖はわたるとも我ハ行ゆく水の流のごとなゆめ、見牛云、俗よおいさといふ、おいさ

○あさ仆　万葉七山ふかき谷川の流を渉るあさ仆の名くおんその川

ハ酈の訛、背灰色嘴赤といふ、和名集二此の鳥一を

のえよとよめるあさ仆は此音の訛なり

紅鶴（ヒサヽキ）

○つき　源順云、漢語鈔云紅鶴　和名豆木　俗用二朱字一、日本紀私記云、

赭花鳥ハ赭花をハ安寧紀よめり

○たふ　大系三ノ巻祇をいふハなくて恐らくハ誤なるべし、ふる事を

ちゝ思ひつゞむるしるしある間を思ひわらふしるしなるべし、

ふるこゑをのく夕はかくやきてうつるかと歌

鵝（カヽウ）

○かたかうなぎ　古語拾遺、令下斛（カヽウ）雀一志止鳥一、秘抄

ふるこゑをよくなくやうなるをいふ、天武紀貢二白亜（シロキ）鳥一、亜

○みこと　枕草子、我ハミコトといひてなどいへど、ミコトリといふなるべし

をカシナキといひ、

方目
○おをめとり　本草綱目云方目一名鴇一名澤虞
俗名護田鳥和名オスメトリ云東
雅云鴇ハうたにバニといふおなうバニとハ鴇の漢音轉
して呼しなり山田法師集ニ云川つらにうもれをるの鴨
待つハかもなかる汀のおもむもおいさぬうもめをあて
ふれなくによるそうやうとす
鵠
○くゞひ　日本紀并和名鈔鵠々ゞと訓ス垂仁紀譽
津別命年壮よなるまでものいハざりしを鵠のこゑを聞て
うべてものいひそめしよし東雅云鵠即々俗
白鳥社字音轉ていふもうしとく

蒼鷺（ゴヲサギ）
○みとさぎ　崔禹錫食經ニ云鷺有二一種一相似而小色
蒼黒有水湖間（漢語抄云蒼鷺美止佐木）散在集ル云ふあるハを云
またてふあをさぎのこゑもゝくとこそいきほゝゝれ

鵯（カヒツブリ）
○にほ　俗ニのよ不及おゝよあり古事記ニハ美保ともいふ
鵯（ホヽヂロ）
○かやくさ　和名鈔云崔鵯小鳥也（和名加夜久木）云々禽本紙
宣集ニかやくさきことたのむ花落あくるをハ
まねうはゝなんかやくさハ草潜（カヤクヾリ）名

葭原雀
○たくみ雀　魚名苑注云巧婦（和名太久美止里）好割葦皮食

中蟲ヲ云ヽ散木集よたくこゑ有ㇾ蛇小れねらくみろ
のそこまそたちてなる春の霧ヵ

鳥腋羽（ワキバネ）

○よはろそ　景行紀歌云．夜摩（ヤマ）苔波（トクニ）區珥能摩（ノマ）保羅
麼（ハ私記曰島乃和
支乃之大乃毛

△獸

鹿

莫傳（ナ）和紫（シ）多（タ）　「そこそ多
（ハ雲）そかは　ハそはおよ姫そもをかるといへともいふ鹿為
谷流そ〳〵ゝ按ㇾ契沖説云万九ノ狭ほてれをかるそとめと
も同十ノ．まそおそをかるな原此のともよめり．蝮

蠶ㇾて蛾の形し．雄器紀云爰（ヱ）命（ミコト）ニ蜾蠃（スガル）ヲ（蠃人名也此ヲ云須我屢）
ㇾ．萩とよそ合せるふよりそかるそ蛾の数なる事を
不考．麻ともふ甚そ考のなひこさしも博学ゑ三度の心．
むまそあるれそるそ．城の陰るそよ云ふ所此年の
麻とんゆれそるそ．茅やふこうんゆさかよ人の笠社人のはとるれふり
ゑゝゝゝそ云ふ云ふ云ふ

かせき　景行紀　白鹿　シロキカセキ　とよみたり　古事記に　こなるくかせきこけちらし　本草綱目に　朝日を浴て走る　かせきを　近くたてるも

猪

秘抄　ゐのか　「秋山記書」に友をあやまちそせるねあそしかなるそくりのしゝ

ゐのこ　秘抄　はらひめ　六角家の異名しとふるそ起ならん

志なのとり　俗用　待宵ねやに新綿多とかねて玉敷なのとり

いとどさ、け役ふる成つゝ　志なのとりのろ神事ねや設

番くのせろ、契沖ハ鵐　ホヽジ　鳩なりといへれとも矢当ハ鵐

いつ花ゑよふすわ名

秘抄　たらん志ゝ　詳ならハ人倫猟術ねやうくゑ

猫

おさくま、ぬ　「さよぬ事てあさこそぬるおひぬるうへく

ひさくほのうゝふまてなく

貂

○ふるき　和名鈔黒貂　和名布流木　源氏末摘花ふるさ、ねのそ

さねいとさうふうはしくえ、ねを集ふるさ、れかそさぬ

をる光かれ入通ねよくへなるとく、江次第ゑ重明

親王著黒貂　ソルキン　裘八重事ゑしよう

鼠

秘抄　みえひさくま

○よめねこ　宝亀てまうけ「よめねこをゑて「よめねこをゑて

くひるをゑて「よめねこをゑて

こうくなるんとね思よう

兎

秘抄　安波法ひみ、　「安ゑ

（雄猿）ぬまむさびらう
月ぶわ
はまおもら　はまおもこ

○男猿をいふ〳〵らとハ猿をもいふまた〳〵と申人もあり〳〵く嵯峨集
そよまさぶ〳〵らハ人の事うをも系誠えうふるたこの
ま〳〵も指をもかこ〳〵
よみ歌

○たう　男猿みな猿をいふ公吳名多し或ハたうとゝ
○たうぶみこ　○いそたちを犯
日吉ハたうぶことといふ通房ていそのこちをこといそれ
をゝこと　新撰猿峡さけふといふ歌引ふ〳〵らふ

〳〵らなゝそ吳〳〵の山れのひあるゝみゃハゆゝぬたうぶこと
八俣新郎「まその歌こ
まゝをも〳〵そ〳〵ゝ

（雌猿）いそのたもとまひ
をかのみこ
ぬこ歌をも　篠目ふこ
さけふこ吳のこをまさをうて
篠目
をゝ　のみこ　「いまゝ

をゝこそ品出そめ
（雄猿）ふくさいなき
ふこのやまさ　ハくさいなき
そうぬ
もかたのむ志　篠目ふこ「わゝこをふこうをうぶもし

狐

○きつね　よよを古る狐「我が子をとらるゝ」などのたぐひ　いぬのたうめ　汚海抄云、乃女ハ狐なり、神宮寮乃女是狐事也、一説伊賀伊勢國よハ狐をたうめ(タウメ)と称し野干(キツネ)坂之伊賀専女(タウメ)男祭りをなし、新猿楽記よ野干(キツネ)

○きつね　数古集よさつねなく城まで「子人社さうゆとさけもおをををなくなるさう球あるれとそさく

猻(カハソ)

○をそ　並名苑　獺(和名乎曽)　あの中ハをそおさをれのなゆこなくてまれくのこるわるこの気、説昭云、猻といよけなもの

ハなるあれよるひあのほるん、そしてハくひろもといつ、それもたもるしてはるちなをとるくをそのなれ

といつしとそく

海驢(アシカ)

○みち　一書よ、海驢アシカと訓を、芸州ちる人、私名鈔ニ葦鹿(アシカ)と見えしう。寺島氏云、海鹿(アシカ)ハ好眠(ネムリ)ヲ島上ニ臥(フシ)睡(ネム)る夫本性ハ海獣のねなの通さめやるぬゆえ

なうまかうてなそ色をてなんはまうよ寺多氏の役号ひ
合をれそ海驢ハアしかりま和但一右の予判者光信
つそ海驢を先行ともそよこそさ行うんとそこ〻寒よ
神代紀下鋪設海驢皮ハ一重そ〻まへ多ハ右ねまうみ
うねなるまとよむ一

麑羊

○かまよ志、皇極紀童謡云阿波能抒尓古佐屢瀉
梅野倶渠梅多尓母多礙底騰哀囉栖哥麻之之
能烏賦山羊日本紀

鼫鼠 牡因
さためす

犬

さいつみ
おもゆき吉犬なり 以吉犬なりとそ、ハ雪社伝を、拠そよ、
きぶを、あゆさといふ、犬よそ名を
一一そ、垂仁紀、丹波國桑田村有人名曰甕襲
一一家有犬名曰足往一往そ、陸機之犬名黄耳、畑ふ
郎た常つる犬を猫ふと名付しかなり、志の多ハよ
さ犬の熱名なるハあるん、熱名なるねハ黒名よハあるん
とまうへし、寛治百そ遂性人そそき桑田社あゆさふ
まそなるねうし一富をまうかいつふ雲 言葉をまうれやハせ一
馬○うかいつふ雲 言葉をまうれやハせ一
○紫苑をめ 同一

△虫蛾

蜻蛉（トンボ）　ヤンマ　蚊（カ）

秋つむ志　あきつ　乃二所ありて

「あきつ」　万葉ニ秋つ蜻蛉といつゝ

きちかうんをなすといふ

之小而黄也　和名キヱンバ　又赤卒　蜻蛉　小而赤也　和名アカヱンバトハ

了今所謂ヤンマの類なるべし

○かけろふ　和名鈔蜻蛉一名胡黍（タノ）　和名カゲロフ

蟋蟀

「ちやろ」

「つゞさせ」　赤杉菜ノ条ニ出ル

裏義　させ　逍遥ノ字ヲ宛ルハ非ナリ

秘伝　ふてつむし　ふてさ等ノ如シ

私も亡父と渉芳生なかおろしの春よりおろし

「ちゝろむし」　秋吟風やもゝかろしうまいい

ちゝよわる夢の

秘伝　とげ蚊帳　「ちゝのよう」ト云ル方ヤ芽ヲ抱乃ち

事のふそう。詩趣風云。六月莎鶏振羽。是ヲ

私ノそゝくハ予ノ別記ニアリ

○ちくろと　未本十四旅宿養源仲正「さらぬだにそでのまつのをそれてもちくろと夢に異名なるらん」

蛍（蛍火）

○萩をもいはゞ　名寄ほ中務「ふるさとを芝刈池の水ぐさに乱れて飛ぶ蛍かな」

乃多やうに萩をもるむしの名

蛇（蛇）

あやめ　こゝもと永承六年五月五日殿上根合ほ良暹法師「さつきやみのふつかの夜のあやめ草ひきたがへてやねをもるらん」

ねをもるとあやめとを、女ともわらべもなをなをといふ。右五番ハ終。

○をろち　和名鈔蛇ハ和名倍美、一云久知奈波、日本紀私記云、乎呂知（ろく）

○をろち　古語拾遺注、太ロチ（ヲロチ）蛇謂之羽ハミ（ふとき）

蛇脱（ヒノタヌケラ）

○むきたまきぬ　「衣ふるきむしの脱ひあをてうろうろ歩行の旅人とまをしまうす」

蜂（そがはち）　万葉の後の歌のお茶の席下ほ委しく

蝶○かちこらこ　字鏡云蝶加波比良古　蛺上同　和名鈔叫刀

鬼(ヲニ)ゑび　清ゑび和名抄云

蛙

川(カハヅ)　きゝ云　川雄(カハヲ)　雌(メ)

蝗蜋(カマキリ)

○いぼむしとも　和名鈔云一名蟷蜋(イボムシ)　和名以保無之利

○いぼむしとも　新猿樂記云蟷蜋(イボムシ)舞之頸筋(クビスヂ)云

蚯蚓(ミミズ)

○かなむし　和名鈔云一名烏毛蟲(カナムシ)　和名加奈無之波無之

白魚(ハクギヨ)

○しらを　和名鈔云衣魚(シラミ)一名白魚(シラヲ)　和名之美波久乎

蚊蟲（ムシ）
頭蟲

○ぬうかさむし　和名抄云、蠛之細微者、觸（フレ）之輒叩頭（和名沼加豆木無之）、浮游繞云、ぬうかさむしのあつまれるなり、さるからに蚊のごとくにさはりくらはず、又蚋（ブヨ）のごとくにさゝずして、ぬうかさむしのごとくにさはりくらふものをいふなるべし、

蜻蛉（クサヒラ）
蜻蜓（トンボ）

○こゝろくさむし　和名抄云、一名蛤蜆（和名須久毛無之）

蠛（ヌカ）
蠓（カ）

○ここよむし　皇極紀云、三年秋七月○取常世蟲（トコヨノムシ）置於清座（キヨキヰ）云々、字鏡蠛（止古与）蠓（無之）と訓せり、

蟋蟀（クツワムシ）

○まろむし　和名鈔云、一名蛤蜣（未名乃弓無之）、食糞蟲也云々、

こかひむしの條に委しく記す、

蜉蝣（カゲロフ）

○ひをむし　原氏漢云、拾芥抄云、蜉蝣（ふゆ）、花鳥餘情云、郭璞注借問蜉蝣輩、寧知龜鶴年（とあるを、花鳥餘情に、蜉蝣を手とりかざして、網流をも蜉蝣とゝく寺島氏、蜉蝣を、ヒヲムシと訓ずるは、今按ずるに、和名鈔云、蜻蛉漢語抄云、比早反、唐韻云、朝生暮死蟲也云々、順ぬるに既なかくいつまでたゝふつゝ飛、センチハチハ人かまへくくうち出て、ゑものさゝんとするさま、字書ゑ、蜻蛉朝生暮死蟲生水上、狀如蠶蛾一名慈母又名蜻蜓本綱云、一名渠略、畧似蛣蟧而大、如指頭身狹而長、有角黃黑色、甲下有

自能飛夏月雨後叢生糞土中朝生夕死又曰或曰蜉蝣水蟲也狀似蠶蛾朝生夕死云云土佐方言ハ
以都乃一名云云

蚯蠖（エダラムシ）

○をさむし　和名鈔云文云蠖（岐奈乎）岐奈之今按ニ此蟲行則必起背故云於岐奈之欤乎の假名未詳字鏡云蠖蚓蟥也屈伸蟲（衣比乃良牟）

蛄蠖

○よなむし　和名鈔云穀米中小黒蟲也（和名与奈奈之）今俗云コクウザウなどよなむしと相通

斑猫

○ふみつき　同書云地膽（和名仁波豆久）一名ふみつきなどいふ　本草類編云斑猫和名未女奈之

蠐蛇（ウハバミ）

○やまかがち　義名死云（蚺蛇々知）

蝮蝮（カヘルヒキ）

○たちし　古事記下定二蝮部一（カヘルヒキノトモノミヤツコ）

かをほそ　和名鈔云一名伏翼（和名加波保里）まをまよふ

蜚蠊（アブラムシ）

○つきむし　同書云（和名豆乃無之）寺島氏非出蟲あやまむし

△草部

草一
鼠麹草
白芷
麥
撫子
菴
夕顔
女郎花 十四
薄 十六

蕙
土筆
山吹
蓮
杜若
山丹
露草 十一
紫苑
桔梗 十七

芹 二
蓬
藤 五
葵 七
菖蒲 十
萩 十五
菊

若菜 三
蒲公英
蕨 四
牡丹 六
燃陽草 九
姫百合 十一
朝顔
蘭
龍膽

を本草類編云畫蠶安久太無之 といつゝクとフ・タとラ混韻.
貝原氏あつもむしハ蛹蟲ことゝゝマ考
子 冬蟲蠶

馬陸 ○いねつきこまろ 和名鈔云一名百足 阿万比古 蚰蜒 ムカデ と混ふへからず
○あまびこ 同書云一名春黍 和名以祢子 不占万名
堤中納言お語云わらはべなどのあまびこのやうなるそらごとゝゝ
とくものゝをなんにくみまほしうする。けらいなることゝゝ

冬菊 十九
菱 二一
大角豆
芭蕉 二三
虎杖
升麻
忍草
稲
旋覆花 二七
水葵 二八
筍 二九
萍 三〇
葦
小豆
鼠尾草
茶 三四
朮
萱草
雁来紅
麥門冬
大凝菜
生薑
菅
大根
葱
葛
酸醤
木芙蓉 二五
薔薇 二六
射干
敷柑子
水松
穭
藻
大豆 三三
蔦
日蔭草
芋
黄連
繁蔞
王瓜
龍
竹
豌豆

昆布
△木部
木 三九
櫻 四〇
茵芋
橘 四三
松
樅
柿 四七
杤
胡頽子
枝
柳
李花 四三
紅葉
門松 四五
柏
木犀
合歓木
茶
梅
桃 四一
卯花
桐
檜
楊梅
譲葉
梹榔
寄生
牛蒡 三〇
草部補遺 自三十 至三八
冬梅
鄭躑躅
棟
椿
杉 四六
梨子
石楠草 四八
蜀椒 四九
松茸

異名分類鈔

草

△草（かや）

かやのひめ　神代紀ニ生ル草祖（カヤノ）草野姫（ヒメ）亦名八野鶏（ヤチ）

是なり。日本紀竟宴歌ニ「とこしへのきやの草（カヤ）

のかれずもあらなむ

Cまかやひめ　延喜弥生晦於家々会。祭蓮法師「秋の野に花よ

りをそめよう。まかやひめもあるれかしよ。

さいたつま　垂拠式曰し。古人説。その越えんとする

いつともいう。虎杖（いたどり）といふ説不可用「虎杖つんでそやうその方

乃ちつるまでの方たらわさ（ママ）ともいふ

木部補遺（キノベノホイ）　自五十　至五四

堇

一日 おばな　莫倩おばな　やたむしろ　よべ　莫倩　よべ　莫倩　おばな　一日

一日 菓子　家土用　一夜　菓子　一日

二日 菓子　二日　菓子　一日

莫倩 向菓　一夜　一夜　一夜

芹

一日 根白菜　莫倩　菓子　一日

雑用 あさら　秋花 ちいく

鼠麴

○みゝなぐさ　秋まさきに出て葉雄しげりてさわらびの
一寸ばかりなるころつむ葉ハさ
やうにれ、多摘て
耳菓子（ミヽナ）ニ方七ハ七種の内汚取といふ嵐麹しといふ法
ぬう正月七日なづなをふるまふなどいふ
なり。但し奥羽民藪（いこべう）菓ニ似ることなし。
和名鈔蒼蘆子（ハヽコ）　本草類編馬先蒿

○ごぎやう　人ハ七種の菓ニハ
七種のおし苔（ナヅ）をつらね（セリ）芹　菁（コギヤウ）ハ仏前ニそなふ
ハ御形（ハヽ）先なの説嵐麹なりといふ

蒲公英

○よこざさ　日重上人子書ニよこざさハ
草といふ国もあるもみの数ハすくなくそ
なあまた花のつくるゝ
ゝ川ぶきのやうなるものとよめるもの
いふ。但し和草（ニグサ）とやう
考ふべし
○ふぢな　○たな　和名鈔ニ蒲公草フヂナ一ニタナ
土筆（つくしは松まつ
かくもくさ）
蓬

ちくろいくさ　「夏秋そのこゝろをさくく

○さゝもく片　舳重なり

篙しさゝ　もゝまさ

「あちさなのやいさのみさゝそなおのゝ思日ゝ身をこゝろ

「契りくんゝうゝ子さゝ　ゝもゝまさめとゝもやはあるよ

「ゝかなのめゝさゝちゝ系ゝさゝ　ゝもゝまさゝの事ゝあんかゝう八

○たゝれ系　一書ゝ

白茅

○なのそゝ　綽俗おゝ

まゆなのゝそゝ

ばゝ万葉第十巻ゝよゝをなのゝそ八海ゝ深ナリソ　英鳴菜なゝ

皆人ゝゝゝ思ゝゝ而右の句ゝ弥せゝ英鳴菜ゝゝゝ

らゝゝ且莫鳴菜漢語抄ゝ用神馬藻字據之ゝ馬八

白さ紙考ふ白ゝをゝ芦毛馬といふも芦のゝらゝゝふ

ゝゝて芽ゝもゝゝて

り馬藻とゝ訳ゝ

おゝはいふさ　竟憲深秘抄云ゝ皆第ゝゝ八ゝゝ

ゝ八月ゝゝといゝゝ俗為童（すり）ゝ首の歌ゝ童の月ゝゝ

ゝゝゝゝ別とゝゝ

ゝゝゝ

ゝゝ

とうちゑつゝ京のとこ〳〵茅の家八枝なくもなく一節〳〵生そふる

八重山吹

嵯峨ちり　朗詠紫塵嫩巖人拳手ともあり・堀川百首

むらさきのちりうちはらひ吾めくみあるにおもはぬ

して・紫塵和ゆるや嵯峨のさそ生ふの巖のそそ生ふの巖ともよめり

山根ぎし　受領ぬれ

そもろ

山根ぎし　受領ぬれ

よそ目にさかりなるもの

山吹

紙屋川

とそ次

面影ぎし　紫玉ぎし　男女あひ添てわするゝ時なきを面影と云ふるうつして・其鏡を指て云ふ

ようし山吹生ひ出なるうつして・妻ハ去ぬ共鏡の面影ぎし夕なるもの

かゝみぐさ　おもかげ鏡の名ぬなるもの

の名ぬうつして

二季ぎし　紫玉　春夏二季ぎし夕なるもの

むらさきぎし　おもかげ鏡の名ぬなるもの

いろ鏡てるもよ

松風ぎし　おもかげ鏡の名ぬなるもの

花いろ紀久り

日休のかたみをも　仙気おろぞ家の一名なろう・花いろく
きけらむ　ことよなる事かくられたさのかとといふ・まとりとお
面なろうへ云ふ秋をもいふそく方十「さのかそこうなろうを
よも花ものこうと咲くしてんしこうてうなろさに
（徐月）
おつまま「まのもの幾さり」は梢なるやおなるま花の
（秋中）
こぞくさ「お葉をもちもちあまそねとさてう有さ
（ものの）
らむこえくは「まるめ文もいとく成ぬまえ年越ぼ
色はりなり

○志やま　猿楽記より麥城レヤリとふも

牡丹
（ふかえくさ）　和名鈔一名鹿韮　和名布加
美久佐
のふかえくさ　莫伽切用し・花まで当あらあばなをも
（は）
名とてくさ　莫伽切用し・花まで当あらあばなをも
して実う抜く当てひよもなうあうし・秋かようさちの
ら秋風の扱をくさ事を歌よなう人男他のんあうとて雑
列しなうの答なさ事ひうさてぞやのうくもうけ
うとなん・仮名ニ名百あう
（山）たちをな　党憲の深秘おうひうそなハ牡丹のは
うくう

をつにをつうくさ　牡丹詩花開葉落二十日之間詞花集
さきそめしよりうつろふ花のもとにてなつ
くさ立夏もすぎて赤のもめうもてふくさうよ咲ちるる花の
おのうへのいろ〳〵
はなつそよ
萩名もそよ　秋花集
むらんさうのいろそよ名
○をつうらさきそなよ　はこよりへ人〻やうやうにてなつの
うたの
萩のそよ
はまなすもそよ　はまなすはうらさきの花といふなり

蓮

葵

秘中
小野をの　桜と雀豹古今注に云。芙蓉。一名荷花。一
名水花云々
池見草　花鏡集同し
かうほねそ　和名抄に云。なひさつ。花も咲ん池ニよき故
に
ぬなはそ　同し　なひさつ花も咲ん池ニよき故
ぬなは風のおうそ
小堪草　同し　花実を陰乾にして末とする。
うふばのめさねなし
そろそろくさ　花なく葉ばかりにて
ふさふさとおひこりあつまりてそよ〳〵と風にうごく
ゆゑ二葵つて出て秋まてそよ〳〵とうごくゆゑ

続名の類をあつめ一書をなせる書の二種あるまゝなるもおもしろ
ぬわけのひとよみ
日をろうつら　をろうつらといふをあやまりよ柱をこれそこ
うををろうつらといふ後あまた漢大府集に山人
乃をろうつよなれとなるものうあまたあるひとうび
ひの一名ともまうす
ひる日かけあよ　は異名よくく考ふに葉はまたとうれ
て是を招てまうれ拔り衛号をなつく仲尼曰鮑荘
子が之智不如葵猶能衛其足ともいふ。はか事
まうまうなれをはか事ともいふ葵ハ葵
葉のあつひハ和名鈔杜衡和名フタバアヒ

一云ツクサ是なりといふ又同書ニ兎葵和名イヌヒレともいふ。いつまの
ようしき草不知杜衡兎葵ともいふ。はかくまのめ
うま草ともいふ。おのの葉ともいふ。
但汗郭璞をひらけりともあまたそこまよ
まもつとも。ひの事とて文字の混ひうや。杜衡し
まもの葉ハ新もむる事のようもれんなさ
をいうにせん。是ハ葵と一おのの葉ともいふ。照
日ハ弥新ハの葉さをゆ又松浦ふるさ一あつひまよ照
日ハ弥新ハの葉さをるにそんなひくらん。是ハ二種混き
・一つあると字ゆ

二日かさ葵よ
さまくさ　まもの葉と一神下ろうものこあれのかさ

ろなどさよかきて狩衣ぬのうへなどにも
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゑてる故おもろもて常夜といふおさ夜といふ常のごとし
万葉に立山のやそ峯をよそに常夜なりこそ
見え初るくし

鷲陽草

にひちは花　六帖「おのねさひひるそこちたしおもさ
おのれ花のよひらくにおひ久てくれ
つまたふさ　言葉の系よりこれ
しかいさろそ　同
○ともろさ　字鏡云葍安知左井　又云止毛ろ。異同考

杜若

莫佐
かはよもぎ　兼名苑云蒲公英おしねさ中ほそかなる
お神さそもぬさ紀なる。いまつかはよもぎといひを後
かはよもぎなどこゑおかるやうといふ方ふさはいさくし乃
莫作
秘中
花の天　蘭さる生ひるかはもぎるとよろく

菖蒲

莫佐
吹菁ふ　吹疑久菁釈次のごとも玉の軒ふくふくさそと
いふ「大内やま社軒ふくものさまおほくしる代なりて
やろを
白ろふ　名よりおの小の猿社白ろふ軒のかうれおと
こゑ玉菁。ふ白ろふ菁社誤なるやふくさ志ふ思

花のつゝ　かつこと云　能因の抱よかつこと云も我
いふ花のつゝらふぢの名をいふ古人の説多くこゝ
こゝらも我いふといふてふと契沖説をいへり此こもの
おようつゝを出せり。こゝも我のつゝといふを非しこゝ今按
よい然よせり我かよちく我出きり。而契沖もちくいへり芹し
と同ものせりかろ。いかなれてかつゝのくさをいへりてよ
ゆしといふれんさてうつこいうなるゝものそといふもの
又こゝさゝれを古説よりてつゝひくく菰の異名とんらくさし
よりやおふし菜　を平らをおすしまゝのぼるあら
ごま

ふし志む　こゝのえれのふし菜なるをいつとなくかうるあ説
一六月生茎

姫百合　莫佐
光菜　「夏野を仏つゝるふりをおとつくひゝ
茎我

山丹
○さね　山丹は太古より名さねと云。古事記神武曰。其川謂
佐川。由者於其川邊山由理草多在故取山由
理草名号佐川也。山由理草本名云佐草也

夏田　莫佐
秋穂草　「水をもて秋穂のよるくと云ふ八重花つゝ

日くるゝの
水の事哉 「こくうちやう」我田の面よ秋なし ゑつけ
そかう志ほるなる

夕顔

我玉
たそかまそ
よめ
をゝけの花 「夜の日はあたく曽ぬる山かな 帝よりの
の花おやとゝまるなるう

朝顔

我玉 志ゝ
莫倩
のゝめそ
夕かけそ 秦半花(テンサンクヮ)なり 「夕かけそ
但万葉十よ「夜のほかあさ志ゐおくさくといふと夕かけ

ゑつ咲まそうなる花と、山の蚕半をの
夕ゑ咲まそ哉といふ事ゑつへうなる
しる色白楼(ケイ)花なり残泳曰
と訓ゑ同名異物和名鈔ゑも勘ゑ芍薬(スミク)拘
杞(スミカ)ゝ倩蚕半花をのこアサカホといひく楼のアサカホ
かゝまこりんも志ゑつゑ
莫倩
かゝこくさ 「吸ゑつこ
ゑもみそてなる乳汁(ちゝ)蘭語そなる「かゝ
鏡そのそお物ゑく、よみ合ゑる小児(わらは)面、蘭語そなる「かゝ
もこのそいなゑ生ゑる鏡そなゑ語そゑ、月弁(ひらき)形そのきつゝ、鏡そゑ
かゑゑこゑ、仰ゑるゑ蚕のこしやうろゑ蚕のそゑなゑ等のなゑと

露草

おもひ草　旧はなきくさ　仙覚抄云。万葉の歌ども見て説
旧歌ども見て
今按ずるに万葉にまれ。歌を咲くと云ふ事なし。咲くと云ふ
咲くと云ふ事のともよろづの草木の花を
説うけつゝ。但し一ツ二ツは花咲草などと云ひて。万葉集
多くは歌おほよそ略
顕草八本名ともくしも見えず。後人の付ける異名ともあり
んぢ集のごとし。つき草

かりなる命ともよめる八露をつゆ草ともいふをもて
おもひをかけて。後世よりの義をお旧ぢ
百枝草　万葉よめる。仙覚未勘え。
旧抹様茎云々枝葉よりは
叶名あり。ともに月草の正字なるべし。本
草鴨跖草。和名鈔鴨頭草。月草八俗字なるべし。
なり百枝花咲説もいふべし。茎もいつとなく。万葉あした夕
ハけぬるつき草のともよめる
旧もなたくさ　簏同よし。
いろよりおもひうつるこゝろのさまをよめる
旧花さま

萩

神中 うつせの花
いろ 色うなくも 和名鈔用鹿鳴草字和名立く故よし
波木
名あるかしハ云ふ
「萩も咲匂ふも雁のなくころよりハ心のなくなるよし」
そ一ハ 月見ぬ
ハ 野辺ハ 野ともなき山ものの花を野ふかくわけ入ひねを
ふ 夏侍 初見ぬ 花ゆゑ見ハしめてこゝろもそらなるつゆ
ぬるゝ袖のうへかな
日 庭見ぬ ハしめてうきねをハ鳴ぬ人のおほさぬよ

古枝ぬ 「玄本神中雁もなく古枝ぬまことに乃秋ふ
花いろ紅なり
ハ 秋野ぬ 夏侍 秋ちかくなれハ花咲る山野ハ
ふ 夏侍 ふかくわけ入
濃深ぬ 日 ハしめてうきねをハ鳴ぬ人もうらめしくなるよ
そ一ハ 色 神中 秋をいろ
さいを色 神中 おく云ふ秋ハいろ
なうきつゆ萩こそ、ぬをハ見ハあれて、擣なるこゑ説
代頭記ぬ妻、行ふこゝ

女郎花
おもひくさ 夏侍 おもひ

茶我なさそらそ花を咲とも。我なさ女郎花を思ひ
そめといふ八重咲せんさいそ是〳〵なんとしてう天智天
皇草花異名よ八。薄といふ。又紫苑とも木かも侭〳〵
めでゝ我おそひまよといふをも。彼茶我合なさる条
勿論しく猶侭はいふまでもそ
蘭
ふぢはうか 茶我おなる漢書り或女郎花り別て孔
〳〵うるご。藤なて綿なる袴をまさく侍こそ并
よくなり出うそく山茶花
○あらいぎ 允恭紀云。饗(イデトビ)乞戸母其蘭(ハラミ)一茎(トヲ)とそ
紫苑
おもひ(おも)おもたこそ 顕昭云。おもひのこそとハ別のそ好き

名よハあくる堂まよといつ。侭〳〵堂まよ名よハ重
重ようての説なり。重ハ紐中おを入こし。綿
入おりよハおもひのこそとハ別のそ好きを
くさ(紐同)さやき
○のゝ〳〵 和名鈔
○ことなたよ 重井おを。ふ花を冠りを施さ〳〵重
を。諸悪無事なるこそ事なしまと名付こし。活
撰十七巻さて「かさそ」ふ事もよ立なんまさそ八事なし
まよのひやなこそ
○かの(あの)たた 字鏡よ鹿舌反。秋(あき)知まよ「寝(ね)そして秋立こそ此風よりや花のたを也乃

まつさほひめ
山下風　薬姫を風しづめ「名ぞれのしたまを社山おろし」
松吹ゆふるうん音もさびしさ
風招風　そしほを風しづめ「をちこちも吹るる音ハ宇ゆ
ま小風招をて音しるしゆまめ
をとこを風「ものもるれ又おもまてよ男名を風社後のつゝぬなさを申
ねさめを　薬姫を風しづめ「社といふなる森も梢
覚を風や夏ちの関とをなるむ
同を風　同しづめ「音ハ吹るる森ハ宇ゆ
露をさそふなるう

薄

久兄を　風雲を
猿なこのらを　「秋もさそ
ふしとをれ心荻をのうねをぬ夏社ねなるうくさ
一云荻音そ　夏侍秋同しづめ「秋宮社雁よおしまこ鳥音夢か
たよるほう風和吹う夢
波そ　「水かなしづ風こそハふて波ハふて夏波まる森を
こほろく
兄たを夢
袖陰を　昔ハ庭死なみ
みくさ　仙覚抄云みそ「真草社我なそこ
くをといふへしそこ「方ハ「あさつ夢ハこくさ社花乃あえ

ぬのより長くてさゝらにあらそ

○紬ふるそま　隣女来よ。紡ぎ処へやをゐるそなゝ
紡ぐ紬ふるそのうまうすなゝし「紡ぎおらかうのてるあ乃村
をうくさまたのむ信濃やさらさらを吹らんといふそなゝひ出
せう。紬ふるそま詞。

龍膽

○えやこそま　和名鈔よき。いつり。瘡をえやこといつ。
瘡を治する功あるやあらん

○たつもとくさ　延喜式典薬寮よりん
おもひそま　古事記採薬ふ云。ふりよりんだうをふひそまと

我作るとあそ依用そ。京極英つ朝お就らそつ

桔梗

一名そま「このそをもうく侮日

思ひのこゝろをそう此しむさの花一名こゝ通遠院殿御
はたり　苦膽（クヽ）　苦膽ぞうんそう附
苦膽はぶやくとそまふしそぶやくは本綱夾漈（ヒ）
采なりといつ。古こゝ集抄名よ。くたるよとあるを。教も
つはぎのちひさ紅やうなる花のかる。此のくたん
とや発るこゝ。又苦丹と出て。牡丹の誤ともいつ

桔梗

いもさま

○やまひこそ　字鏡そ

（付録）あり　ありひふき　藻塩草などに云。是いまくさぐさしもの
（付録）あてなひこと　ここ今按ずるに和名抄などにしるせる
○をのさいき　本草新編などに
菊　（八重）まさをくさ　寛平菊合などにつくさるゝ百代草
（変体）百枝草　我邦古書に大和国と輪の里など老ありて能百
年菊残りあるべくいひなせるもてあそびなり。此菊秋冬に
至りても猶花ありて久しく凋ざるを以て名とせるにや
月一日毎枝菊の下雫を採しめ用ひ給ふべし。百枝草
此名を並倭ぢく此菊にあてゝ名ぶるにや。仍号百枝草云々。

（付録）「名ぶるにや」の箇所百枝草と白ぬかれ
（付録）千足草　古今集に「久方の雲ゐにまがふ菊の花
うつろふ時は千足草とぞ見る」とよめるは大体此
草にや。
（付録）飛足草　義経記に云。此菊奥州衣川の里より関越
常に新妻をつかはしける。業平随分と云々。
もいつもとりにやりけるとなん。
（付録）よもひ草　万代不易などに
（付録）つぎね草　義経記に云。陸奥より兵糧米のぞめあり
わびぬ。分けたる一枝にこれにうつろふ。ほどろおなをもてこのぞめ時。
是菊の一名を二つよりもちゐ。

…ことをうたへしまゝにもあらず、…といひうつすかハ筑紫ぶりにおつゝ
下向して、いまをうたをうたへるよりおこれるいつもかゝるうたはうたへ
妙和かさゝしよもさ」 「さハひらめ高市宿祢のうちにかたしよ
よもさいふくつかまつらう。但、さいひてあとをまをいつゝ。か
そしよをさゝらハまをいふうくかまつるうといふうてかまつ
つゝしみをそ。さうハしてまつるさとハかゝるよふ紀なるべし。和
こゝろのれなくうるうしく純仲宮の張まつるなるべし。和
名鈔ニ菊和名加波良与毛岐
こかねくさ 藤原集同一ニ菊ニおふあさ月社歟人の
こかねまつるうきもの酒の教よつまつるし

おみなくさ 「秋ふかみおみなくさ花いたうさき
るるをそゝく
雅房からよもも紀 宇鏡ニ菊辛与毛岐トアリ
秋きくべれ花 藻塩草ニあさちふもやしるふよもぎも杜
まくまつるのうつろも秋きくかな花ニをさゝめよゝあり。或
説ニ、菊を秋きく、とよむとそ。今按ニ、埃嚢抄云、聖
一國師重陽ノ佛事ノ時、アキ草ノ花ヲ、北ノ一
ガキニウエテ、ノントクト南ノ山ヲ見ルトヨ
まをしゝふそ。ゑハ古文前集ニ、陶淵明ガ採菊
東籬下ニ悠然見南山ト云詩ヲ書ヲ小ゝし。採
を植とゼ一往寓の説なるべし。埃嚢抄ニ藻塩

まだ秋ちくの花も混りて秋くさの花
秋はぎ　薄　女郎花　藤ばかま　桔梗
をみなへし　山ゐの花　竜胆
いなてまた　七月の九日ばかりまでも花さく
万代をへん

○まだあるもの　垣ほの浅茅　庭ほの浅茅
ら〳〵萌えたるもの　秋の野といふべきもの
花の外　花はさらなり　葉のおもしろく咲ゆきたる
そのまゝ実のなりたるも　花のおちたるあとも
よのつねならぬ萌

一、菊

和名菊　莫作抔義也因一名延年
和名抄花実ともに薬や酒にもまじへ用ゆ
ちぐさに秋は寒くなりゆくまゝに霜をもいとはで
よく和名抄にもいへるごとく延年ともいふべし
書とゝのへうつし又和のこゝろをもしるべし
うつし秋のこゝろもおのづからそなはるべし
菊の名　莫作抔義也因一名延年抔義也因一名
推しうつす時をえたるもの
秋菊の　花ももちてそ
かざしつる人の千年の
のこゝろ

菱　みすも　秋花　「こもの池の菱吹風のゆきゝ波よかゝよ

葦　よかを　俗用　なよもめ

よゝー　あしのことゝいふものごとし

難波葦　藻指葦　同　秋中　篠波葦かゝるめなるうらゝゆゑ夕霧

水葱葦　同　俗云　水葱葦ともなし

ひとり秋なる　葵仲秋同し　「あふひ草とゝもに花咲ことを云葵なるへし

藻　名河苔　和名加波奈　苔なるへし

物とゝれしも藻と文選よ海苔之菜（叢）とあり此

て藻の葉ちゝといふもうゝん

菅　みこも　和名　苔なるへし

藺の水の花ゝ名

莽　かゝみ草　同　波なるへし

さいはひ　篠田氏「難波江の波風いくあきは」
よみもさうれんさい集もやはりかなる
ほそそくさ　秘我抄同し「なのみそ汁のまえそくさ」
秘我抄にたのみそを弱もいうそうし
濱萩　伊勢國より八丈を濱萩とつゝう。古人の説人
の知る所し。契沖師云。濱萩ハ濱より生ずる萩をいふ。
也伊勢物語よかうくさ。丹後のようさ浦より濱萩を
もつゝ志うを難波の芦いせの濱萩とつゝ俗説據もな
き説なるべし。人のおもひのそ〳〵かきやうなるべし。

大根

かゝみ　みそ　秘玉屋抄同し。大内まで餅のようおく大

根なり。さいまでかゝみやそれ個まで
なんぢうの引散本草のおもかさ地
方行くる「こゝをのくもうちのかゝみそ片ささうえ
ふるそうかつる
きいまろ　人日七種の菜之中
○このそな　頭註云。教倫我云。このをとハ大根の花し孫
姫式云浪華津之蘆菔送三冬而奢二月之順和
名云蘆菔大根也

大豆

秋白芽　秘玉抄同し「秋の田とまるとハんしう萩白
まかりこゝめの月もそ花のゑもえ

大角豆

心前草 同し 同しくまいのな虫風まなる人参ところ
ゆうし雪とろろぬそ

小豆

散る理草 同し 秋な
下枝もたるむ方面
葱○うつは草 叶るひの中空なる名、歳人ろ、の実別種
ぜて水しそうへさおうは
松葉草 そ一は同し 一書つ重てそ、葉形松葉ま秋
ここて赤のおこのことくくしてそ花ふとうる
蔦の花七六月開といへともとより葉ま実ころなる

芭蕉

葱芭蕉 実物
葱芭蕉 実ハ葉ハ芭蕉植同し一吹風社実や破ん笠
葉ハ軒端のことし
鼠尾草
ゆうけそ 実ハ同し 久ふやおんそうと
水かきまのき葉形ちう花さけハなものやく
玉名草 「いのう事
さま余しのう。このハまの名ハ乃名

日の語紋

○松葉草　「松の葉の如くにて」なる。山の谷のようく〳〵かゝる。葛八名所ともよめり。

○蔓草　形式ゝあり。乃ち蔓なり。狐ともいへり。

虎杖

○二葉ある草　旧書ゝ。二葉ある草多し。いづれ

日陰草

○かゝみ草　形式ゝあり。乃ち蔓なり。狐ともいへり。

虎杖

○二葉ある草　旧書ゝ。二葉ある草多し。いづれ

○たちひ　及正紀ニ云。於是有ニ井曰ニ瑞井一則汲ニ洗ニ太子ニ時ニ多遅花落有ニ于井中ニ因テ為ニ太子ノ名ニ也。多遅花ハ虎杖花也云々

茶○をとこつき　をとこ乳の花と万葉集よめり。名義和訣云。おほとちハ男郎花と云。めのとちハ女郎花やうなる花の白なり。人ゝ多くハ誤て伊勢守ともいふ。和文室ハ国ゝ多くハ誤あり。おほとちのハ誤と名付。伴のそをそかへて。信濃よりおこせ給ふとゝ。和名鈔云茶和名

酸醤

○かゞち　神代紀。赤酸醤此ヲ云ニ阿加牟知一云々。蓀 於保美知 度知 字鏡

苦菜可食云々。

芋（そは）　露（そは）草　山名七夕季　中院内府
日借云七月七日早旦ニ芋の葉ニ露ヲとりて
硯の水とそろゝし梶ノ葉ニ芋の葉ニ露ヲ
つゝみてなかるゝ水ニ流すおいなくまもむる
ことあるものをいもゝ（は）ろこそ
升麻（うたかは）
求（さゝくさ）　順和名ニ出たり一云そうまおいくさ
をけら　万葉ニ
　草書よあしゝ（さゝくさ）の後ゝ指の下モよりくし
　をけらとよめり

木芙蓉（もゝは）
もゝはの花　藻塩草ニ此事も多れど略ス　藻塩草の木芙
蓉ハ牡丹林檎薬ニよれり　万葉ニ
　ねもころに花ハうけれやもゝとよの
　ふるまでに
古今ニ
　秋ハきぬ紅葉ハやどれ花ハちれ
　ねをもなきて雁ハゆくなり
古今ニ
　山なしの花江都督　小式部内侍
　ともゝはの
　ふるの文章ニよりてよめり
唐棣花（ゝろ〳〵）　右ニ同　ゝろ〳〵し契沖ハ云方言ニ赤ハ黒
義なり　栗ニよりていへり波祢受と俗ニいへり
是正しくゝろめなるへし

○かくそも　萱草おなじ。和名釵（カ）子久（ク）末（マ）「うかうけ
はるさえかくのかくそもそもそも

雁来紅（ゲイヨウ）
かまつうは（うそ）
日 名そそけなる葉のまゝ花となりてみゆるをいふ
かさつう花

射干
からそあふぎ　古語拾遺云、以二天押草押之一以二烏扇一扇之云々、今俗ひあふぎといふおなじ、日を金烏陽烏なといへり、日扇烏有とかゝるいはれ歟、未案
要集云、よをさふといふ草なりとあれや、庭の面にかゝるを扇の
なとゝいふならん

王孫

○かたのこれ花　万葉集十九巻の八十ばいもらうくさ
の事井蛙抄乃かたるの条とあり、仙覚云、かたのこ
みハ井のそこともつゝまれ咲草なりと、契
沖云、かたことそ、よまの沢に百合の形の花咲て、大サ二
三寸許の花実葉ともさゝ斑あり、本草の王孫釋名草
藕之とそ、系まくかたこと百合といふ、王孫和名
ツチハリ、又云スハリクサ

旋覆花（ヲグルマ）
○かまはゝくさ　延喜式并康頼本草類編云、旋復
花加古豆保久佐　伊勢集、かまつほくさ一山田をしそうつはの
里もそうたまそ秋ハかりんと云ふのわくさ

○ももしくさ　字鏡

麥門冬

やまそげ　万十一「足引の山菅の根のやまそげ」源順云、麥門冬　和名夜末須介

藪柑子

○山たちそ　古今集「我宿をたのもしと思へば山たちそなのそでも出ぬへし」

きちかなの　栄花物語「うすやうにけうらさなど」

そてかそこ　山たちそなどいふもし

簡（井）○志ほくさ　仙覚抄「志ほくさの尻刺（シリサシ）といふもし

簡は一名なくさ、契沖曰、万二「志賀の山越」

茅花（つばな）くらさの人まもりぬるかもさたそひ

水葵

○なぎ　万葉「なぎさのあつきみぎりをのみうちもとほり」

契沖云、小葱（ケギ）ハ、水葵ト云ヘリ、和名抄、水葵ト云ヘリ、

云、醫心方、和名奈支、似二澤瀉一花青白云、

○こゝろなしくさ　古今集「なにごとのおはしますをばしるらめど」

大凝菜（トコロテン）

○こゝろふと　和名鈔云、本朝式云、凝海藻（吉留毛波俗用志太二字）

云古々呂布止ト云、職人尽ノ合ニ、ところてんと云ふなるへし、

○ころもて　万二「ころもてすみれ」

○うみまつ　屋氏ふるき
なをうなてなよもあ
松こ海よせいうる
海松 和名美須保俗用之云

竹

古訓 かこハーく
かからはーく
和歌 かくるーら
うーは
なるまつ　むくハるまし竹をよるあるは
小枝ま
くるまし常ならし

川玉藻　吳待秋花
なる川玉藻をとりつさ我
夕玉藻　同
麻莫なるらん

○汁実　普の王子献竹を植帰依云何可二十日無二此君
いけるとといふ。弁社実名とかゝり。植茎よりも清ゝ社お
うへ社実とあふけいるーるのふれ弁

○吾友　白楽天ふ寄ふ竹を植ふ友ともといふ。奉翔

文粋第十一云唐太子賓客白樂天愛為吾友ノ
ヨキ哉ヨキ哉ト後来テ「我友ト云ミノサノヨキ事イカヨウ
ニヨノカ有ソ云ン

筍（タケノコ）の称（ナ）さ〻 筍ヲ方言ニ「云ふこそ竹の園生残りけりよめる
中竹豈有萌芽（キザシ）孝子祈天（テ）得筍（タケノコ）多シ
生薑（ショウガ）
穭（ヒツチ）
おろのおし
蜀黍（トウキビ）
のらまめ
胡瓜（キウリ）
そいうり
昆布
いろめ

えひらめ
牛蒡（ゴボウ）
きたさす
うまふぢさ
已上和名鈔

△補　今おさなふ麻ハ俗名数聚ヲ本社説ヨリ抄出シテ旦其ホ
古書ヨリ和ノ名ノミノコヲモ抄下モヨ字ト
名ヲモトラス俗ト有ヲモ俗名類聚ナリ
俗トアルヲモ俗名ヲ注ヲ是先ヲノ説ヲモノ
ナリ又上ヨ俗稱ノ和名ヲ注ヲ是先ヲノ説ヲモノ
ヲナヲヌ物アリ今ウアラ法説ヲ參考シテ
誤多カルヘシ　ヲ式ヲ作ル
僅ヨオヒノ名ヲ
當歸　半夏ナト音ヨヨヒヲアラヒトヲモノハ俗呼ノ和名ヲ
ヲ抄テヲキヲヲケレ　カンヲルヲヲヲハナリ　次木部　倣之

枯梗（リ）　あさかほ　字　をみくさ　同
龍膽（多）　たつのいくさ　同
芍藥　ふかみ　俗
赤箭（カラサウ）　やまさけ　字　ひとくさ　康本
　　をとくし　一云かみのやうら　俗　天麻ヨリ
　　天麻ハ根ノ名ナリト云リ　赤箭ハ苗ノ名

天門冬（カヅラ）　すすろくさ　俗
蕨（ワラビ）　わらび　一云めまな　俗
黃精　あまな　字
地黃　さわしめ　式
甘草　あまうさ　俗
人參　かまふしげくさ　一云くまのいは　一云人參ハ康説ノ如ク
　　そなり故ヨ鹿蹄草トアリ　別ニ狼草トアリ二ケトハ和名
　　鉄糸雅注ヨ獣呑菊噉ヌ而嚼半日齝羊曰齝鹿曰齧ト云ヲ皆ニケ
　　カムトヨモヒヒツヲ今俗牛ノ
　　ひ（ヒ）ヲ逆ヲテクヽトイフ石見ノ
　　なり人参一名神草トモ
　　み味苦然腐ヌヘクカラ
　　すくなひこなくすね　薬根ヲ
　　いそぐみ　一云いをぐさ　里ハ
　　いはこけハ

石蠶（イハトラカ）　いはとら　一云いをぐさ　里ハ
卷柏（イハヒ）　いはこけハ

細辛　みらふねくさ　一云ひきおちひたひくさは
獨活　ひたちらは●のたら　字
蒜朝　のせり　一云あまのたら　俗
女青　かぎねくさは●ぬくさ　康本
蘼蕪　からうまそ　一云のらえ　和
巴戟　やまひいらぎは
地膚　よそくさ　一云まなくさは
蒺藜　はまびしは●まろひし　康本
防葵　やまなすび　和
防風　くまのすかる　一云はまうな
苦笑　かまな　一云うみおこまは

簡茹　ねあざみ　一云よひふくさは
羊桃　いらいくさは
天名精　ちまたのき　一云はまあらいぎ　一云あうまくさは
澤蘭　はみ　一云おもはまふくらは
須斷　ちまさいげは
雲實　やまらくさは●よいみくさ　字
黃耆　くろくさ　一云ありくさ和●なしみくさ　字
漏蘆　そいき　一云ふかいてくさ　和
飛廉草　うろさは
夏枯草　やませり　一云おほせりみそうまりは
當歸

催馬楽大芹　おほぜり
もうはうとそ

秦芃（ゼンニサウ）　つかりくさ　一云はうとくさ和
白頭公（ゼカイサウ）　おきなくさ　一云なのくさは
蓋草（カリヤス）　かきな　一云あしねは

麻黄　うつねくさ　一云なのこのはは●かつえくさ
知母（チモ）　やまのしわ●やまとくさ
大青（タイセイ）　そとくさ　一云くるくさ和　大青ハ藍ノ別名ナリトモイヘリ
決明（ケツメイ）　えひすくさ和
狗尾草（クビソウ）　ちぬねこくさは　まあまそ「ちぬねこくさおのこのこころ」
ほろむて秋おく露の玉やとるらむ　孟子　尽心章ニ悪ハ憎ヲ悪ム

其乱苗也といふ是をなり一名はらき

貝母（バイモ）　はゝくり和●おひ字
連翹　いしちくさ　一云いたちさせ和●あはくさ
石韋（セキヰ）　いをねうそ　一云いはぐさは●くみねのまゝ
千扁（センペン）　たちまちくさ和
萹蓄（ヘンチク）　うまゝくさは●たちまちくさ●よいやなぎ唐
三白草（サンペクサウ）　かたまろくさ和●かたのくさ●こつまろ

くさ　唐本
旋花（センカ）　もやひとくさ　和大戟同一訓●澤漆（タイケイ）　唐本
敗醤　ちめくさ和　物産家ニヲミナヘレナリトムリ然レドモ和名抄別ニ女郎花ヲミナヘレト出セリイカヾ白花ノモノヲヨトコヘレト云ヒ歟可考　同一訓
白芷　うさもちゝ　一云よろひくさは

青箱（ムラサキトラノヲ）
杜蘅（カニアフヒ）
白鮮（タマノシラ）
白薇（ロクオンサウ）

うまくさ一云あまくさ
ふたまごみ一云つふねくさ 和

いつぶくさ
そるまごくさ一云くろくさ又云あまな
やもみ云くるまくさ 和名抄 本草云ほそばもろこし
そらにまそれそえみかしごそまとなりしようぶそるべ
壬二集ふるとしてそ生るべし今按本草綱目山草白薇生平原川谷二月苗葉如小豆藤蔓延生其根白如手指長一二尺有節節生細鬚
淫羊藿（カリクサ）
うむさな一云やまどりくさ又云まらたけ
そくさ 和
くわさな字

紫參（ハルトラノヲ）
地楡（アレモカウ）
良薑子（オメキクサ）

ちゐそくさ
あやめたむ一云えそひすねは
おほみるくさ 和
そくさ 四声字類抄
ほそのあくさ
おほそのはそくさ 和名抄 本草云水池之旁合生之
蓉花（ヌカ）
さきぐさ 和名抄 本草云水池之旁合生之
大黄
おほきは
鱒腸草（タカサリノクソ）
うまそきたし 訓義馬今来歟
半夏（アヒルノカミソ）
ほそぐそに
蒟醤
わふいび 和

ほそばそ式

甘遂（ナツトウダイ）
虎掌（コブシ）
莽花（コカモシ）
藜蘆（ヒロウ）

よハそ一云ふひろハ
おほいそみハ
はよふれハ
やまうはら一云あしまつるみ云そよせハ
くさ 康今
いへふれお
もよたのふ一
ねぜといぎハ
つきぬぐさお
ちやひとくさハ
こやすくさお

鬼葵（キツネノサウ）
烏歴子（イヌナツメ）

赭魁（ネナシカヅラ）
及已（ウルシ）
大戟（イチハツ）
鳶尾

慧苡（ヒトツバヨ）
商陸（ヤマゴボウ）
茺蔚（ヤクモサウ）
白英（ヒヨドリジヤウゴ）
石龍蒭（タカウラレ）
石龍芮

づまたまハ●たまつまつ字古語拾遺云薏子
いをすざ和
めはまきハ
ねろまつくみのいひね和●ほろまくさ字
うまぜひたひ和●たつぜひげ字
ふのづみ和

栝樓（ゴマノ）
玄參

からもろこハ
おまくさハ●きまくさ式古語拾遺ニ天押首ノ
押立ノそおー草名あらず
きまくさ和

苦參
藁本

くらへ一云まひこひくさ和
さへもそらまつ一云そらまつ

酢醤（スイモクサ）　かたぎみ和　まるまかってそうおもうかみそまと
苅蘭（チクサ）　かぐみは　茶のまま社あろうみそとそろそろ
徐長卿（フナワフ）　ひめかぐみは
白前（ハキ）　のかぐさは
白薇　やまうぐみは神代紀ハ二白薇（カミノカハラ）皮ヲ為舟ト
茵蔯蒿（インチンフキ）　ひきよもぎは
白蒿　むろよもぎ一云このはらよもぎは
玉采留行（スクサ）　かさくさは
景天（ベンケイサウ）　いさくさは
猿喜天（サキライベラ）　はるとを一云おほうばら　社名又さ体とうつるをし・の
菝葜　そらむぐみ云さるのこし式

菜耳　なもみ和俗ゝ仮字を用ゐ・雄蒼をめなもみと云
三稜草（ミツカド）　みくさは　お稚い帳「つぼくさ」ともむろ一さ意ともろ
王孫（ヨシレイサウ）　ぬをりぐさ　訓義伯　針筵
　古今やと地勢ゐつもろ・茅（チ）草（カヤ）かり小ともろ・注茅
積雪草（カキヅドホシ）　つぼくさは
芽　ちは万葉ゝ茅生（チフ）ともろ
　とぶ文俗仮字をは万葉ぶをさあ
　さぐのはつかとよ先ゝ

菜草　志ぎは今俗語ゝ芝社字を用ゐ
懐香　くれおもは　さゝ系ゐ名ゝ呉ゐ名ゝ

をれをたくまつの外も多くのこえてこころ乱

白慈草　ゆたぶりくさは　訓義馬食不去故名之歟
狼牙（ダイコン）　こまにをぎは

おほろかにもえ打ちまかせ人やはかなき

貫衆（キンシウ）
筋蕨（ノウベン）
荘草（オホタニワシダ）

おほわらびは
そくとくは
いぬしだ和　まかせ

よなかほとにり人あかな紀

蒼蕪　すぢは似二羊蹄一味酸（スル）故名之
由跋　かきにもなは由跋ハ杜岡氏の説ムサレアラミ次一説ヲ非ス
劇草　かきつぞたは

蛇床子（ヤブセラシ）
莎草（ミノガサ）　くぐ和　万葉第三

ちる雪とみるまでに
雪をツミラとよめるくぐつハけまして編ミ名ヲ
とぬはうこと
さそはし

莞　おほねは　訓義大抵蘭欤

まそうち指ひ一枚ねそく天武紀莞子ガ一と訓ヲ

蓐　さそちすは

菖蒲　かそらふぢは　万十六、菖蒲（フヂキ）ヲさそひおとるとてつまを愛
　　仲哀、菖蒲ヲ寫誤なるとて改菖蒲（カラフヂ）ヲ菖蒲（アヤメ）とよめるなり

苧菊　おむらうづらは
馬鞭草（バチキ）　くまたづらは　形状（かたち）
かうぢつらそもなの純水（すみ）
五味　さねうづらは　万葉十二真玉葛（サヨカツラ）とよめり。訓義見え
弐（ふた）さなうつらとよめり。同音通
燃萄　えびうづらは　蒲萄（えびかづら）ともいふ
防己　あをうづらは　形（かた）ちあをくつらなれども
まれにづら式　●こゝに可ぶさ　康幸
忍冬　すいうつらは　花吸香而甘故名之歟
千歳蘡　あまづらは　甘葛（あまづら）
百部（ヒヤクブ）　ほどつらは　キレカクレ　八雲系民説一説と非ずといふ

細辛草　くろうづらは　万十六にあもりぬまこもをその山
そつら手ゆるされくるしきこと也
通草　あけびうづらは　和名抄に寂玩集よつて注
らそのあるあくびさうづらの義あるべし
頭注　本草の説と
前胡　こませり式
茵草　もいくさは
丹蔘　ほこたくさは
香薷　いぬあらいぎは
鶏頭　みつそいぬは
苧　からむしは

熟艾（リカアト）　やいくさは
柿子（コイチヲ）　おう（唐本）
蛇ノ名　うつよめくさは
著（ヲコシ）　めど（和）
芸　くさよしのうは（唐本ニハ帖乱くさとよう）
　まつ（唐本ニハ松とそ）もおとふまつの乱
牛膝（井ノコツヒ）　為ぬくづちは●和名いぬ宝

△木部

木枝　やまおちもの　八雲ノ後頼抄木枝名ヲ
　ほつき（ホツキ）　同云枝し方トヲ。ヒサキ八万葉第十ヨリ
　まえさうそうしのヲ枝景木ヲ末枝ゆくえヲ。と
　あり。契沖師云。ヒサキノスエノトヨリ流布本ヨ。
　誤し。分九巻ヨ最末枝トシテホツエトヨリ。
　またふヒ　和名鈔叔桓（タフリ）和名ニ源氏宿舟ノヨソヒ
　ふうよふうそうてつめきそくる枝ヨ「まつこふ
　アヌ和ヨハあヒ枝ヲ云ふのさんよまつとふんん

○小え　万六ふうよのふ小枝さ「とよめり。同安ヨ小ヲ
　ハ為枝し人のヨを小ヨとい「ヨとし「く

梅

夫木 雪散尺余　　花玉同一「山ざとの軒端に咲るかさしくを
　　ふるさとも雪ぬも袖尺をやさん
藻塩 雪をへるよ　「こゝのよいみ雪ふるうし雞はいろこを
　　ふる雪をへるよ
花玉 白ろ雪ふるへるよあれ
句 梅ふ　　明日
秘中 みさをの花　玉同一「をろこ」おこうのをれ
　　ふるくる雪紅の花　独のうち
　　ふるくる雪紅の花おこの木を

冬梅

花玉 和名ふ　藻塩同一「万代ふ雪ふ弁ふ和名ふ書をや
　　なてふ花をこそん
明日 梅つさ花

櫻

撃 花の兄　詠歌のちめる咲ふなるときく
夫木 雪尺ふ　花玉同一「引ちおさてなとへまるふる雪尺ふ
　　あるをもちぬふみの命を
明日 他名ふ　同一「あさくふ名ふいうなる人のうちおさてか
　　のこうさをちるを尺ふ雪ふ花ふ名付ふ
　　ゆくてまけふれ一「けふのよう名付ふ
花玉 花雪化ふ　「ちを犯ふ同の山おる雪ふ雪ふ
　　あるの夕ふ
夫木 尋深草　花玉同一「ふよめよう一の山のいろふ
　　花ふうふふかふまふ雪
明日 吉野ふ　かさしふ

鄭躅（ぐぢ）

秋田 いなむさ　也俗云虎原廣綱死亦合「いなむさ」云々

―此系のここちの花ども形もやうれを

美作 まやうさ

奥州 史そ草　「花咲て秋ぞおそふ史とうまひこそ多葉乃

そてよりうさ

秘中 史たさま　「多佛（ミツイ）」此田仮のをこのころふしめ

史よりとやハ史ハ形撰ハ帆のまくしげふたを引く。つし

を史ふきまといつもそ。強くる統秋

茵芋（ぢくし）

○よつハじ　「万ハ也ちうこ」

ふはちん時ふきそそ花上下暑ととうり匹寿。よそつし上

長至

○みつハし　近江島所多合歓みつし社を「ま」を也ち

よそつハ志のそなん立ちさ打ハあまこころみまと

李花

秘花 むめ　つさを花　「そ

梅花さをそ礼やさかうこ

卯花

美作 うつえくさ　「まうこ

山社さるハたうそうあ月人なうそ比三田の

は 雪乙多　「をるよそも社ぬまし雪乙多名ぬハをまふ

らてふまつハ
垣ねそよ「ほそ〳〵さけまて
望の宿
卯月雪　道ふし
反雪

○あたまの花　此雪名一書ニ拙ク抽ク書ハ拙
口訣云卯の花ハ雪あたまのやうにして実なるゆへ
つゝて東ハ卯の方なるゆへ也ハ卯乃
花といふそれ従ふ歟

楝

あふちそよ「山ちをかけて軒ちかき
とゝそとれぬる

橘

「屋古そ　「うゑおきし代八昔
昔そ　「代ゝをへて富ハあまり昔そ　書ハ
○香果　垂仁紀云。九十年春二月。天皇命二田道間守一
遣常世國一令レ求二非時香果一。今謂橘是也。そ
「そゝもりかくのみからに
山ひこの

紅葉

名こそ　「秋もゝ色ゝ
山のせそふく
妻恋そ　「ふゝる山ちもくゝまるそ
ふらゝ
錦そ　「ゝる山おろしそ

桐

一葉落而天下知レ秋ト云リ

椿○あをつなし

あのまを掬ごなつるもの

松

霧もるみし

暮日雫や雪けの海力

松
和名抄ニ
代ヲ 「大内やそこも人なれ
てらん
檜
さわらび 「山毎ハむつまし
なる毎ニそうせう。管絃馬楽等の三のくし抔ヲよむ。むの本
人ちかくあれなれと。うとくなりぬるをいふ。こゝろ
いつくしき神おもふ。夏名希抔ともよめり。をを

つゝしみおもふなり。古人多ハさゝこつさハ抔と
いふ。但し契沖説ハ和名抄ニ筋(サキク)の字といへれ
ども。さうにも云説ようて。抔といふもこゝ妙なる処
ニ同ヲ 英伊抔ヲハ同し「大内やそこも人なれ
うつもくさおほるかをそくしさ
田同ヲ 田し「山時ニ同ヲ 字方ニハほゝをさまりぬるうそ
ゑまる花ハ咲くう
幸(サキ)ヲ ふうきうをいふ。和名抄ニ草ヲとあるまを
富ヲ 幸草とあり。さ紀ヲ一名とみそといふこと。
私ニ。和名抄ニハ蔓(サキクサ)日本紀私記云。福草。草枝ヲ相
値葉ヲ相當也とあり。そをを幸草ともいふ。

杉　秘訣いそ木　「大井川いそ木未詳」
いやちりて
檜（ヒ）○おみの木　万葉に「汀のこおもてに臣木（オミノキ）
もおいつきえひろひつ」とあり。契沖をこのあしといへり。
柏　やま（ヤマ）云らて　神楽歌に「八しまして我ゆきもとうをもちてといふ
楊梅　秘訣なつかも（ヤマモヽ）

梨子
○あもの　なしともいふ　袖をふりておうのことといふことおり
ことにうたよむべし。お模集に「おさのこ」森羅万象

榊　秘訣さかき（サカキ）
○くしのを　くしは櫛笥なり。たゝ榊を串ざまにさゝ
事のあきらかなるくしといふなるべし。榊をなべてのくしといふことあるをなべての榊をくしといふことあるをなべての榊を
しゐて我そうかさしゝ門かしらゆふ玉をそいのる
うらはもわこの玉の緒　一書に「香久山にて榊を葉ながらうらなひ
杠（ユズリハ）谷樹（ヒロハ）　秘訣ゆづるはいらもき　文武紀に「大寶二年
年正月丙子、造宮職献二杠谷樹一、長サ八尋（ヒロ）俗曰比良木（ヒラ）」とあり
この物を和名鈔木類に「黄楊　和名比良木」と載らる

一ハ不審なり、黄芩ハ草綱目よ、黄芩ノ山草部よ載せ漢極多ようて、和名鈔ようく、本朝黄芩と載せ「衣乃牟」ハあれなりともひいらぎのようてハいそ〳〵とそせふといふやうのものをうゑ、ばあいまゝ本草よ出てく、爲かてのうしいいらぬとおもふて俗稱なり、但しあよ出ていとようすれ〳〵すいやうよ、えらぬやうて常盛あしさゝれハ爲るあらうそといひ、出ぬいちもまゝともいへり、いらぬ部(ブ)なり、そ塞よ刺あるをいふ、ふらぬまゝハ疼(ヒラキ)木なり、そ塞の刺(イラ)ゝてさせでヒヽラクとよそう

譲葉
枳(ヒ)る草　爲(ユヅリ)ハ

人ゝまゝてれたれやゝもむ、歯茶をも枳るまとゝ枳あ当て、儀う葉といふやうよ、父よお續の義をとう、枳るまといふなるへし

石(ヒ)楠(ナヅ)草

○さゝくさもむさ　和名鈔云、和名止比良乃木、俗云佐久奈無佐、義者集云、よのハさゝなんさゝを乃ゝ「もゝさゝ」れ枳るまハさゝ乃むさ〳〵のまゝゆゝ乃ゝ人もゝてゝ乃也

○こゝらゝ　音義抄云、山寺社南杉をてよ石楠乃ゝ乃ゝ乃ゝ

ふさ〳〵ある。類聚抄
杤（トチノキ）
○ひさかき　うつほ拾遺
のをかしきおそ〳〵てき
し。低神の略歟。俗よりのむまやしやをそく
合子歟木（ムノキ）
○かうの弐木　六帖「そよ吹よるハこひぬるかこのみ
ゑのこんやりけさくなりよ
浜擲
○あぢまさ　和名鈔ハ和名海ツ・天智紀、狭井連
浜擲（アヂマサ）ニ又古事記垂仁坐二浜擲（ハサ）之長穂宮一仁徳帝

御歌よアチニサノシテモミユともあ、

蜀椒（サンセウ）
なるはじかみ　つふさはぜのみ　和名鈔
胡頽子（ナツミ）
○をろなつみ　和名鈔
茶○同さやまきこさ　日重よ人ゆえ同さまし、さよと云
ハ茶の事なり。後拾遺「生ひそめてるねもうき森の
下草そ同さまくへかりける」松風をそ
といへるく
寄生（ヤドリキ）
○ほよ　万葉十八「あしひきの

名う。契沖師云。和名紗寄生。和名。夜止里木。一名保夜呂なう。ヨとやう。」

松茸

○松の花　冷泉中納言為尹卿詠あり

梢　こぬれ也　一万十九。長歌。見川のこぬれもまされる。ノウの反又こずえともいふ。末とやう。末のうらをといふ。うらとは末と上なり

なまを。未ぬ也といふ。

ほ云ふさ　一方云。鳥總立見柄山尓船木伐とも。十七なとうたひて。船木さうそふのとおもひよりてとうめう。本をきりて。末おさうそふのよりて。山神樹神をまつるをいふといふ

茯苓　まつほど　延喜式典薬寮。仏義朴陰気日本紀。前伝を陰ほと云也

松毬　まつふぐり　大鏡五云。仏供大納言小松ふぐりに。むらのをく付てなりけり。

房を中松ふぐり

まつのさ　松遠てまつのさをみよ。社のおとゝさ作りつゝをハまちこともいまさのハさう

△補

榲　さゝ和　松葉ある名ゆゑ。仏義朴名歟。さゝとうふ。仏義朴の文字を似てかく。

椶　さくろ　木可為筋也。仏義朴。椶を筋と似也

いつを、ねば、ねば、なるつ

楓　をうづらは

桂　めうづらは

朱櫻　はもう一云ふそさくら和　古事記上云。取二天

香山之天波波迦而ゝ異同ゝ考　六帖一類と

よあそくやとのふそはそう和●なら新さ字

朴　ゆ志又云そはそう和●山本多布の名なや

梧桐　つこ和　甲斐新園つこのゆ

柘榴　たみは　万ニいすつこやま

もゝつこ新おもも

枸杞　ぬこぐすこは

蔓椒　いたちも志のみ一云ほそさに　皇極紀ホソキ新

河又ゆ、萩本集陳ニこのさねよハいそもそ！うこ

もゝてゝり。ねをゝもゝ社まよんゝてさけ

呉茱萸　かそはゞこのみは

食茱萸　おはたらは

厚朴　ほゝかゞもは　万十九「ふせこゝのさゝけてゝ床ほゝの

ゝそあゝとのゝもゝのあをねきあをゝ

欒　むくれよゞもさは

槻　つきもき和　集「園やとのちりさゝらてふ床くさ社まのつき

せあをゝわまゝ井ゝろゝへめ

木瓜　もけは

羊蹯躅（モヽヅ、ヅ）　いもつゝじは　此仁和寺にて生ひそしげるといへり

山榴　あいつゝじは

槐　ゑんじゅは　今俗ヨシジュと云

樗　ぬでは　今俗謂ヌルデ　垣川ともくそもぬまでなどいひてよしある名はいとそこ

櫰　あをきは　古事記阿波岐原をこゝに後古人よりみそぎ海やあをきのはらとよめるなどを證

柧棱　そはそぎは　仁徳紀大后御歌みそそかまたしたなるさゝらをれもぶれもちりはてゝ枯るゝみとりなるかしわのえことさゝらのこと

穀　かぢは　古語枕草子云・天ノ日鷲神・津ノ咋見神穀木ノ種をえかつぬ木ノ山のかつぬ木乃とよめるも云・万十に「あしかうち

杜仲（ニシきゞ）　いまゆきは　くそまゆこと云かさひきくらは　訓義抄櫻敷

衛矛（ヤヽレ）　やまれは　今俗ニレとのこと

蕪夷　さねりこぶきは　数本を一束ねにして売るをいふ

榆　

石檀　

まんゆを引きそるつゝハぬしやのうへき

陵苔　まかやき一云のせうはゝ俗のうぜんのづらとゝ。
あの紙よ入るゆいく

五茄（ウニギ）　むこさは

賣子木（チレヒノキ）　かそちさ紙きは・なさ紙き康本　万葉集ニ帖
ふうやちさ水をよみそうの紙

鷄冠木　この一でゝさ一云かへるでれき和　万ハ系
宿よ黄蜜蝦（モミヅルカヘデ）ま・田十ゆこもち山わのかつらで紙ゝ
づまでとよ多ゝ紫紙ま紙ま似ゝる紙和名ゝ
なる・俗ゝそもちといゝつそよく紅ふそゝ紙な

接骨木（トコロ）　みやつこ木に

金漆樹　こゝあぶら紙きよ古事記・盤之媛皇后歌・菜
烏草樹　さゝふのきは仁徳
佐斯夫能紀（サシブノキ）・斯賀蛸（シガヂ）多迩（タニ）・淤斐陀流（オヒタル）上下畧厚顔
ねこ云・小烏草樹（カラスフノキ）・己ゝ下生立（ハヘタツ）なり・山中紙あハ・サ
せ木紙木と云・ビサ・キ似ゝく実紙紙よ・紫ま・もし
とゝ

女貞（ヤブツバキ）　たづ紙きみゝひめつゝむきは堀川院百首
陸のおくそひ和名抄ゝ

莽草（シキミ）　志きみは・もはこゝ
黄苓（モレヒ）木蘭　ひゝらさ和・き休の
もくらよ和・くろもむさ康本

蔓荊（ハマゴウ）　もまはひ和

荊　なまえ木は

蜀漆　やまうつぎ云う

草まき義を

木天蓼　わたゝび　俗云またび

梗　ねすみもち木は

なるく

うたゝねのまくら

おもものをみもち

まくら

鉤樟（クロモジ）　くぬぎは擧樹同訓　日本紀歴木同訓　一万四

辛夷（コブシ）　やまあらゝき一云こふし　はまぢのみは・ひさ

さくらみ云・志たなこの字まきまくらにうちふくらして枝

まくらまきふくらかなをはきをなふくらかぬる添川柳

ほそ百そこ「かつら」まくらまくらまくらまくらまくら

寛政六年甲寅正月吉旦

京都書林　勝村治右衛門
大坂書林　武村嘉兵衛
東都書林　西村平八
秋田屋太右衛門
和泉屋庄次郎
村上勘兵衛
柳原喜兵衛
森本太助

文政十一子仲夏求板

異名分類大全　酒茶篇　嗣出
酒名　二千二百八十余
茶名　千五百四十余
併酒茶之器物共　全四冊